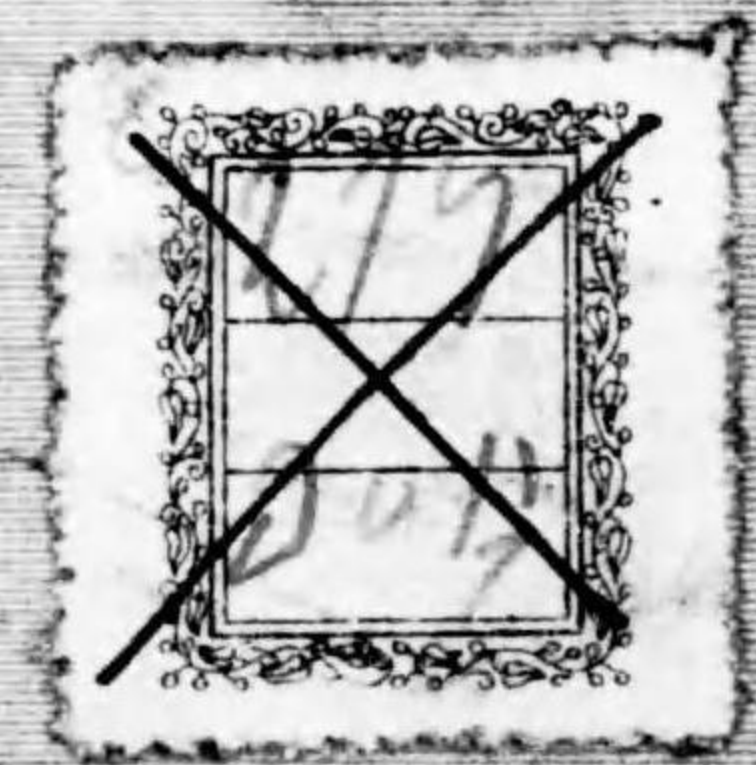




草

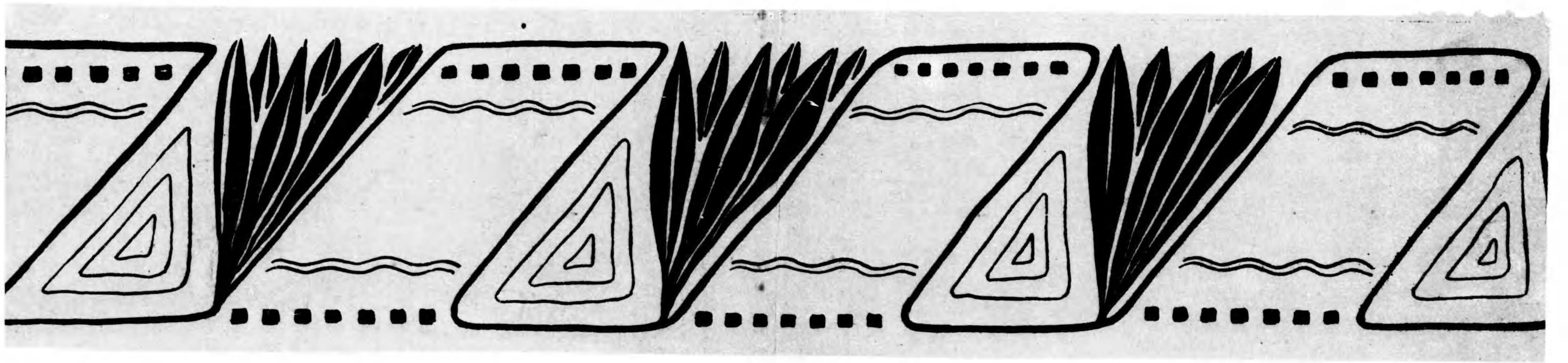
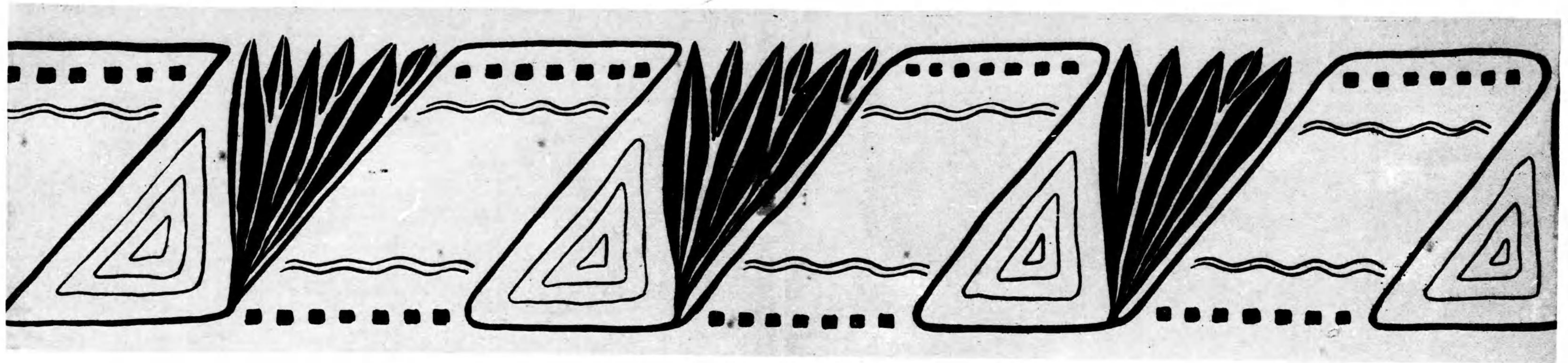
花

う

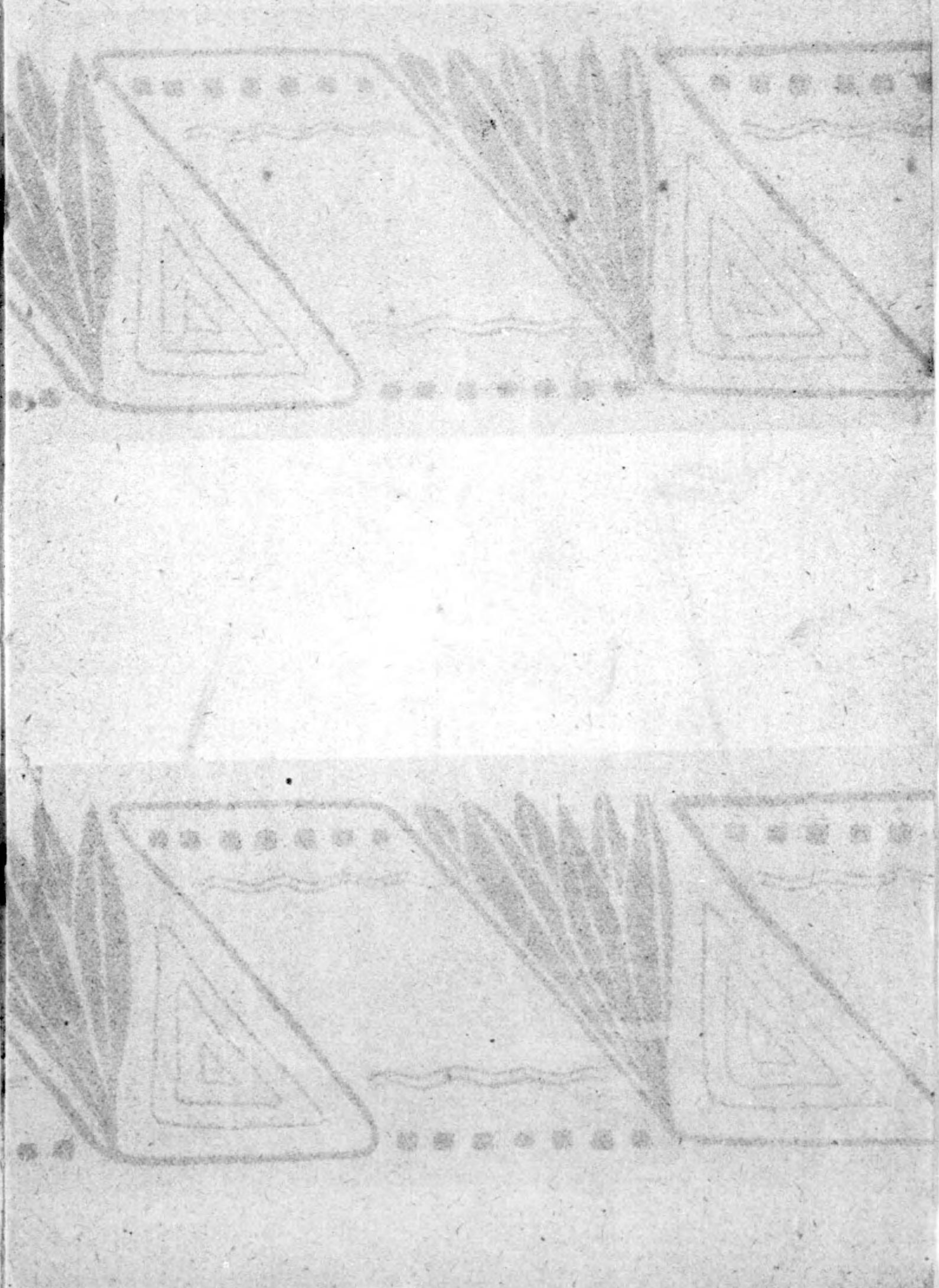


始





47103
463



自序

貧弱な脳味噌をアルコールで融かしつ、書き上げた本稿は、自分が従來の作物とは多少捉へた方面も違ふし、内容も興味本位の何等文藝的の價値は無い、けれども是れを新潟縣唯一の大新聞、北越新報に掲げて江湖に問ふた處、幸にも豫期以上の喝采を博し、次で同縣下の佐渡新聞が掲げたのみか、東北及信越地方を地盤とする新派劇壇の飛將志村松之助一座が、是れを脚色して各地を巡業し、到る處で大入りし入を占めてゐるのは、筆者としては淡き満足ではあるが、今や装束凝らして出版する贅六堂主人か、他日残本を抱へて、小首を捻るやうな懸念が無いでも無いが乞ほる、儘に稿を授けて、一天、地六、果して讀者に受けるかどうかさ案じつ、斯んな序文を書く云爾。

大正丁巳歳月上旬

須磨華壇の南窓にて

七石生



う き 草 後編

島川七石著

爲吉に尾行られるとは氣が着かないお歌は、百合子を抱へたり、歩かせたりして根津の大下水に沿って真ッ直ぐに音樂學校の側へ出ると、其處から右へ折れやうとした時。

「ア、彼方へ出しちやア拙い」と、獨語して俄に急ぎ足になつた爲吉は、いきなりお歌の背後から衝突つた、すると不意を喰つたお歌は、あれーッ」と叫ぶと共に一堪りもない、バツと上る砂烟り、哀れ大道の真ん中に四つん匍となつた。

「これはどうも飛んでも無いことを致しました」

為吉は周章で頭を下げた具合は、實際真に迫つて居た

「貴女ごもお怪我が有りませんでしたか」

素早く抱き起すと無惨にも、腕は両方とも砂に塗れて黒血の色が痛々しいさへあるに、左の膝はペロ／＼と皮が剥けて、白い脛をダラ／＼と傳はる鮮血は正に淋漓、潮時と見わたして止め度も無い有様であつた。

「わッ」

此の恐しい血に慄へて泣き出した百合子を庇護ふ餘裕はない。

「大變だッ」

袂から取り出した純白の半巾、開けば颯と流るゝ香水の薫り身に浸みるのを惜し氣も無く、手足の血筋ながら拭き取て。

「はて」と一寸考へたが今度は矢庭に解いた我が大巾羽二重の兵兒帯をビリ／＼

ッ、即座の緋帯とある。

此の時通り掛つた三人の壯漢。

「やア、劇しい真似をしやがつたナ」

斯う云つて其處へ佇立むと。

「遂ひ粗忽したもんですから」

為吉の頭がペコリと下つた。

「戲談ぢや無いせ、こんな別嬪を倒すには外に良い場所が澤山有らア」と、云ひ乍らチラと為吉に目配せをして。

氣を注げねわ本當に」と、捨科白を残して御隠殿の方へ立ち去つてしまつた、とは細い所へ着かないお歌は、人の氣配に、颯と顔を赤めて慌しく前を掻き合せて立ち上る鼻へ。

「誠に申譯が有りません」と、大地に頭を摺り附けん許りの詫びやうに、却つて

氣の毒になつたお歌は。

「何アに、それ程でもないんですわ、結構な帯まで切つて頂きまして私こそ却つてお氣の毒でございます」

「飛んでも無い、誠に失禮ですが、僕の家は直き其處の御隠殿を下りて直ぐ右ツ角ですが、どうぞお入來下さつて醫者から洗つて頂き度いのですが、俵を尋ねるより家へ行つた方が早いですから、僕の肩に掴まつて」

御隠殿を下りて直ぐ右の角は、新俳優の重鎮江井芳香の住居だとは、斯く申す為吉自身は知らぬが、お歌は疾うに知つて居るから、借ては此の人も幕内の人かと、二十歳のお歌は、耳朶や双頬に熱い反照りが來る。

殊に、午砲前には宅へ歸れない都合もある。

「それでは……」

頗る煮に切らない態を看て取つた為吉は。

「さうして下さらないと、私の氣が濟まないのですから」

抱ゆるやうに右肩でお歌を扶け、百合子を左の手で引きながら。

「さア……」

斯うなつては辭まう術も無い。

「恐れ入ります」も、口の内で御隠殿の方へ來蒐つた時には四邊りには一個の人影も無かつた、折り柄不意に其處へ現はれて。

「やい」と大手を擴げたのは、先刻の壯漢三名であつた。

二

お歌を扶けて行く為吉の行く手に立ち塞がり。

「やイツ」と、大きな聲を浴せてから為吉の面をキツと睨み。

「巫山戯た真似をしやがる、此の大根野郎奴」と、口汚い。

が、此の「大根野郎」は、唯だのつべりと色の白いことを云ふたに過ぎなかつたが、爲吉を新俳優と思ひ込んだお歌の耳には大變力が籠つて響いたのであつた偶然の功名、筆頭第一に數へなければなるまい。

何を云ふんです、君等は」

此の大根俳優、顔ののつべりして居るのに似合はず、賣る喧嘩ならば買はうと態度甚だ強硬なり矣

「突つ轉ろばして怪我をさせて、親切かかしに引き摺り込まうなんて、天保時代にや流行つたらうが大正の今日此頃では廢つた手でね、筧棒めそんな洒落臭い手で俺達の前をのこく通らうとは、押しが太いにも程が有らア馬鹿ッ」

「貴様等の云ふことは何を云ふのか少しも判らん、貴様等の對手になつて居る間に此の姐さんの傷が手遅れに成つてしまふ、退かんか」

つと立ち塞がつた真ん中の奴を突くが早いか、此方が早いか、空を切つて呻る

鐵拳が一つ、しかし巧みに避けて空を撲たせると。

「生意氣だッ」

「それッ」と、是れが合圖で。

「あゝもし貴郎」

負傷を忘れて口を出したお歌、其の美しい顔をチロリと眺めた漢壯の一人は。

「邪魔するねわ」

襟を掴んでするくくッ。

歌やア……」

子供心にも此の光景に驚いて聲を上げた百合子を。

五月蠅やッ……」

むんずと抱き上げたと見れば、足に覺わの海豚の力松、横に抱いた儘で、御隠殿を轟進ら。

「あれ……お嬢様が……」

絞り上げた金切聲、半ばで手拭は逸早く當座の猿轡となつたが、此の言葉に心得たりと見せた爲吉の海豹の五郎が。

姐さん、待つてお在で

後とは無言で、此れまた坂を駆け降りて一目散、雲を霞の章駄天走り。

速早の猿轡、口から廻して後ろでシカツと手拭を結び上げると。

「宜いか餘……」

「合點……」と、答へたのは章魚の幸平、一人は五重の塔を指して墓地を縫ふて

隠れる、一人は圖書館目蒐けて消ね失せた。

電光石火……

物の二十分とはかゝらぬ早業であつた。

取り残されたお歌は、半ば狂亂の態で、足袋跳足のまゝ、手拭ひさへも取らず

に、手の痛さも足の痛さも、イヤそれ所の騒ぎでは無い！、御隠殿の踏切り番の爺さんが目を丸くして驚くのも更に頓着無く、駆け付けた江井芳香の門前でバツタリ出合つたは、此の家の主人公其の人であつた、然り新派劇壇に其の人ありと謳はれ、其の人氣は故人となつた川上音次郎を墮する程の全盛を極はめて居る江井であつた。

三

當時全盛を極める新派の旗頭、不景氣の風に颯と翻へした旗を、新派の牙城たる本郷座に押立て、花々しく開けた餅搗芝居の一と興行旨く當つて福々しく迎へる正月を、憎くやかゝつた月の叢雲、お正月の酒を旨く呑めない病氣の爲めに、神田の花柳界に於ける流行醫者花田醫院へ行かうと、抱への俵に乗りかけた所であつた。

「セ……先生……」

バツタリ倒れて、其の濫い好みの外套の裾を掴んで張り上げた聲は、立たぬが尤もで、手拭がまだ取れて居ないのだ。

油畫の背景に田浦遠見を使ひ、風音が本雨の舞臺では、チヨイ／＼斯んな筋書に出ツ喰はすが借て夫れを實地で、然かも自分が相方となると、流石の江井先生頗るトツチて、科白に詰つた、然り大に慌て、舞臺ならば大向から屬倒されるに違ひ無い。

「こりや唯事ぢやない」と、心の中で直覺した江井は。

「おい……」

是れも呆氣に取られて居る名譽の一人抱へ車夫の伊佐公に何か目配せをする事心得た車夫が、自暴に結んだ手拭を漸つと解き。

「おい姉さん……」

大きな聲を出してお歌の背中を叩いた、けれども此處まで来て氣に緩みが出たのか。

「ウーン……」

苦るしさうな呻き聲を發して、お歌は其處へ倒れてしまつた。

「是れは不可ん……」

江井は驚きの聲を發すると共に。

「伊佐公、水を早く……」

「へエ……」

慌てふためいた車夫の伊佐公は、宙を飛ぶやうに裏口へ廻つたと思ふと、五郎八茶碗に水を吸み來たり。

「さア姉さん……」と、茶碗の縁をお歌の口許へ持つて行くが、堅く結んだ唇は解けない。

「おいそんな事をして居ないで顔へ水を吹て遣れ」

「へね……」

車夫の伊佐公は江井が云ふが儘にお歌の面へ水を吹き掛けてから

「おい姉さん……」

二三度呼ぶと、其の聲が通じたと見えてお歌は黒目勝の眼を細く開けた。

「おい姉さん緊りおしよ」

流石稼業柄、江井は優しい言葉を掛けた、すると氣の付いたお歌は。

「先生……」と、聲を掛けながら些さか亂れて居る前を掻き合せ。

「先生、大變……」

「何に……」

江井は双眼を睜つてお歌の面をヂツと瞰下ろした。

「先生、大變ですわ、貴郎の所の俳優さんが、お嬢様を取られて、悪漢を追つ掛

けて、む、向ふへ、早く早く」

簾から棒に斯んなことを云はれても判らう筈の無い江井は。

「姉さん、着付て言つて御覽、私の所は書生だけで弟子は一人も置かないことにして居るよ」

「わッ、それでは彼奴も悪漢か」

身顛して、スツクと立ち上つたお歌の顔は、見る／＼内に白臘のやうに變つてしまつた。

「あゝ、目が廻る、警察へは内密よ、先生」

言ひ終るか終らぬ内に、お歌はバタリ、再び氣絶してしまつた。

四

百合子は攫はれる、お歌は氣絶すると云ふ大騒動が起つたとは少しも知らず、

濃やかな鴛鴦の夢を、午砲の音に覺された二人は、茶の間を出ると、お留がもう
チャンと晝飯の支度をして置いた。

「晝飯もさう欲しく無いナ」

「でも貴郎、久し振りに百合子と顔を並べて召上つたらお宜しいのに？」

「おうさうく、良子さんは何處までも立派な百合子の母に成て下さつた」

砂川は心から喜んだ。

「あんなに可愛い子が、だうしてく忘れられるでせう、本當に少しの間でも邪
魔扱のやうにして外へ出すのわ罰が當るまいかと思ひますわ」

「だが是ればかりはだうも子、なア乳母や、さうだらう」

「おほくくお嬢様も追つけて七つで居らつしやいますから」

「さうだよ女の子の知恵の附くは、本當に早いからネ」と、一しきり百合子の話
に花が咲いたが、其の花の主は一時を打つても歸つて來ない。

「遅いわね」

お良は時計を見上げて斯う言ひ出すと。

「本當に遅いなア」

子を思ふ親の情、砂川の面には暗い色が浮かんだ。

「遅ふございますこと」

「途中で變つた事が有つたんじゃないかしら」

斯う云つて傍に居る砂川とお留の面を當分に眺めながら。

「ねわ若様、私何だか動悸が烈うございますわ」

まづ直覺に來るお良は、自分の思ひ出したことを信するやうにヂツと男の顔を
眺めながら砂川の返辭を待つ。

「そんなことは萬々有るまいと思ふがね」

打ち消しはしたが、砂川の面に宿つた暗い影は去らなかつた。

「私も別に變つたことは有るまいとは思いますが」と、語つて尙ほも言葉を重ねたお良が。

「一体あのお歌と云ふ子は中々の確り女ですから間違ひは無いとは思つて居ますが」

お良の美しい面にもサツと陰影が宿つた。

「いくらしつかり女でも一と世帯持つたことが無い間は、だうも本當じやア在りませんよ奥様……」

お留が捉へ處の無い言葉を挾んで砂川の面に宿つた不安の色を濃くさせた時。

「本當に女と云ふものはさうだらうねお留」

お良が其の美しい眉を擧めた時、戸口に俥が停つた。

「御免下せね」

聞き馴れない、濁みた男の聲、三人は云ひ合したやうに互の顔を見合せながら

目顔で夫れとお留に合圖した。

「はい」

返辭も軽く、取り敢へず入り口へ立て行つたお留が。

「あらッ……」

高く叫ぶお留の聲に驚いて、妖精のお良が偕てこそと立ち上ると。

「良子ッ」と、砂川は嚴かな聲で。

「貴婦人がはしたない、何んと云ふことです」

流石は腹から子爵の家に生れ附いて來た砂川は、何んとも云へぬ威嚴が備つて居た。

五

妖精が起ち上つたのをチロリと眺めた砂川が、平素に無き嚴格な語氣を以つて

制した爲め。

「は……はい……」

流石の妖婦も其の威嚴に打たれて其處へ立ち悸くんでしまった。

「はしたない真似をなさるな」

再び制したが、外に誰れも居るでは無し、此の家の主人役として、悠然として

砂川が起ち上つた時。

「若様……」

非常に慌てた態度でお留が入つた來た。

「どうしたのだ」

不圖氣が付くと、お留は髪もおどろに振り亂したお歌を背負つて居た、然り人心地の無いお歌を背負つて居るのであつた、續て一人、新派俳優の重鎮にして人氣盛んなる江井芳香。

砂川から嗜められたお良は、口を利かう、利いて悪いかとモチくと手持不沙汰であつたが、其美しい面は此の珍客を江井其の人と知つてか知らずか忽ちサツと茜さした、がお留はそんな事には少しも頓着も無く、甲斐々々しくも室の隅にてお歌に氣を取られて物を云ふことさへ忘れて居るのであつた。

「どうぞお座り下さい」
一寸座り兼ねた芳香を見て、砂川が口切りの役を勤めた。

「どうぞお當て遊ばして」

座蒲團を進める位の事は、お留がせずともお良に出來た。

「御免を蒙ります」

江井は丁寧に會釋して蒲團の上へ座ると。

「始めましてお目に掛ります、私は江井芳香と申しまして」

後どの言葉を續けやうとした時、砂川は右の手を上げて是を制し。

「イヤ御挨拶きでも無く、代り目毎には必らず拜見に出ます君の濁行者の一人です」と、軽く口を切つた後。

「申し遅れましたが、僕は駿河臺に住んで居ります砂川欽哉と申す、此處の保護者です」

此の一言を聴くと、江井は慌て、敷いた座蒲團を這り。

「あッ砂川子爵の御令息で居らつしやいましたか」

どうやら江井は非常に驚いたやうであつたが。

是れは飛んでも無い不調法を致しました、毎度御最負に預りまして身に餘る光

榮と存じます」

商賣柄でもあるが江井は再び頭を下げると共に。

「何時も詰らぬ狂言ばかりお目に掛けまして何共申譯けがございません、私達

も多少目先きの變つた新しい外國の脚本を選みますが、何を申しましても素養が

在りませんので舞臺効果なぞと云ふものは薬にしたくもありません御最負様に對しましては誠に面目次第もございません」

「さう謙遜されるには及びません、歌舞伎劇の事は知りませんが新しい劇そのものは貴郎方の手に依つて開拓されるべきものです」

砂川は斯う云て手にせる金口を賁盆に落し。

「時に失禮ですが、あの婦人は一体どうしたのでございます」

「實は」と、江井が見た丈けのことを落ちも無く語り終つた時。

「お嬢様ア……」

物凄くお歌の聲、砂川はギョツとして胸を躍らせた。

六

お歌が夢現の間に、百合子を尋ねる物凄くお歌の聲を聞くと。

「若様ッ」

低い聲で砂川を呼んだ江井が一寸耳を傾けながら。

「息を吹き返へしてから此方、ズウツとあれでして、何處とも取り留めの無い事を云つて居るのです、そんな行きさつが在るか一寸も知れませんが、此の方の言葉の端しから考へて見ますと實に容易ならぬ犯罪が潜んで居るやうでございませう
流石は稼業人、其の言葉は舞臺の科白そくりであつた、劇場であつたならば新内の出語りか何かで、二重舞臺でグツと思ひ入れのある處大向ふからは最負の見物が熱狂して。

「江井ッ……」と、やんやの喝采を浴せる處だ。

が江井は傍に座つて居る妖婦お良に氣を置きながら。

「何んでも悪漢が少くも三名位は居りまして其の中の一人が私の門弟が、一座の俳優で在るやうに、此の御婦人をして、谷中の墓地邊へ連れ出して酷い目に合せ

た上に令嬢を攫つて行つたものと見えます、夫れに餘つほど此の御婦人が抵抗をされたと見えて、手足にひどい擦り剥き傷が有ります」

江井は斯う云つて座敷の隅に寝て居るお歌の姿を眺めた。

「お嬢様ア……」

お歌はまたしても百合子を呼び立てた。

「あの通りです」

痛たしくしきりに眺める江井の面には江戸ッ兒の専有する、他人へでも同情すると云ふ温かい涙が傳はつた。

「あの通りです」

「成程……」

「實にお氣の毒です」

「實際どうしたのぞう」

砂川は一寸振り返つてお歌の袖を捲くつて見ると、白い綺麗な緋帯がしてあるし、裾を捲つて見ると左足の胸も同じやうに厚い緋帯が施してある。

「これまでに御療治をなさつて下さつたのですか、實に一方ならぬ御親切で不肖砂川欽哉、厚くお禮を述べます」

砂川は一寸頭を下げた。

「マア若様、お禮は後とで悠くり承りませう、で、それに就きまして實に不思議に此へぬのは、此の方の傷の泥が綺麗に拭き落してあつて、絞りの羽二重で結であつたことです」

江井は是れまで語り續けると一旦言葉を切つて。

「然かも夫れが男の兵兒帯に相違無いんですが、……實は此の御婦人は餘つ程氣丈なお方と見わまして、卒倒される時、警察へは決して届けて呉れるなど云ふこととして、其のまゝ御参考の爲めに持つて参りました」と、風呂敷の中から其の

兵兒帯を取出した。

砂川は一寸赤くなつて。

「實は君の俠氣に對して何も彼も打ち明けますが、その誘拐された娘は僕の隠し子なんで、そこらを心配した此のお歌……此の被害者です……が警察への口止めを頼んだものと思はれます」

流石に斯う事實を打ち明ける砂川の面は赤かつた。

「わッ隠し兒ッ……」

江井は大きな聲を出した、さうして一人で何か首肯いた。

七

江井は砂川がさも耻しさうに、女中の手から兎兎に浚はれた兒が、自分の隠し兒であると告白するのを聽て居たが。

「あゝ左様でございますか」

「何氣無く軽く首肯くと共に伏し目勝ちに砂川の面を見上げ。

「兎に角感心な御婦人です、それで甚だ失禮千萬な云ひ草ですが、そんな御事情なら醫師の方も充分に秘密を守つて呉れると云ふ安心の出来るのが必要でございますうな」

親切な江井の言葉、砂川は夫を聴くと軽く頭を下げ。

「其の事です、居無くなつた娘のことは断念るにしても、此病人はどうしても救はなければなりませんのです」

「御尤もです、斯う申すと口巾ついたやうですが、私はお浦と云へば多少は人に知られた女の子として育てられた男ですから、私がお引き受けしまして格好な醫師を一人御紹介致しますせう」

渡りの船に等しい親切な言葉は砂川は我れにも無く頭を下げて。

「是れはどうも何から何まで恐れ入りました、いづれ改めて御禮を申し上げますが、願はれることなら此の際貴郎の俠氣に縋ります」

人氣稼業の江井は、此の一言を聴くと。

「分に過ぎたお言葉です、それでは早速御當家へ来るやうに頼んで参りませう、夫れから他にも御用が在りますなら仰やつて下さい」

「君ッ、感謝します」

起ち上つて江井の手を堅く握つて、砂川は肺腑の底から出たやうな感謝の聲を続つた。

「恐れ入ります」と、砂川の手を振り返へした江井は。

「では失禮します」

「何分宜しくお頼み申します」と、江井を玄關に送り出して、お歌の枕許へ戻つて来た砂川は物をも云はずに双腕を組んだ、さうして良しはらくは深く沈黙

の人となつて何か思案を廻らして居るやうであつた。

手足の傷——俳優と偽名——兵兒帶を裂いて縋帶——手拭の猿轡——百合子の誘拐……此の五項の外に發狂したお歌から手懸りの取れやう筈の無い以上、詮議立てする手段は無いのであるが、その一項として、砂川に暗示すら與へるものが無い。

「あゝ……」

一つ長い溜息を吐いた時。

「ねね貴郎、私も何んだか氣が變に成つてよ」

傍らから掛けたお良の言葉、夫れに驚いて其の面を眺めると、双眼とも霞が、つたやうにドンヨリとして、然かも何んとも云へぬ悪性の濕みが見わたるのである。「お良、お前は斯んなこと位で氣が變になるやうなら、今の内に越後へ歸つた方が得だよ」

如何なる場合にも怯げ無い氣象を、砂川は是れだけの言葉の中にもハツキリと表はして居る。

「少し待て見當が付いた」と、元氣良く云つた砂川は、懷中から萬年筆を取り出して、其處に在つた半紙に。

タイプライター、外交員、寫字生、調査係、收金員、簿記係各一名大至急入用——九段中阪下—エム商會。

と、認め終ると、廣告料を小爲替に組んで投函すべく、某大新聞社に宛てた封書をお留に渡した。

八

東京名所の一つである九段の中阪をダラ〜と降りた右角の道具店の前に佇立だ年若き書生風の男が。

「一寸伺ひますが此の近所にエム商會と云ふのがございませうか」

店頭で煙草を吹かして居た店員は怪訝な顔をして。

「何時頃出来たんです」

主客の位置が顛倒して、店員の方から書生に訊した。

「サア其の邊のことは知りませんが、實は昨日新聞に事務員を募集すると云ふ廣告が出て居たもんですから、斯うして尋ねて来たんですが、幾ら尋ねても所在が判明しないので弱り切つて居るのです」

書生は泣き出しさうな顔をして、店員の記憶から尋ねるエム商會の所在を喚起其の蒼白い貧弱な容貌と、腹の空いて居るやうな物腰格好は、双の杖を探つても朝日は愚かバツトの喫みさしても出ないだらう。

「わゝと……」

店員は勿体らしく小首を傾かて何か考へて居たが。

「さうくエム商會と云へば今年の夏頃もそんな事を言つて尋ねて来た人が有りましたよ、私共は長年の間其處に住んで居るんですが、そんな家は知りませんが貴郎は場所を間違へたのでは在りませんか」
斯う云はれると、其の書生は懷中から六つに疊んだ新聞を取り出し、一寸廣告欄を黙讀して居たが。

「矢ッ張り九段の中阪下と立派に許して在ります」

彼れは自分の誤つて居ぬのを立証すべく、其の新聞に掲げて在る、廣告欄を指示した。

「成程……」

廣告欄に眼を落した廣告は。

「君ッ、ヒョツとするど此の店員は何か喰はせものかも知れませんよ」

「はア……イヤ、これはどうも種々と御厄介になりました」

書生風の男は失望の色を面に浮かべながら、以前来た道の中阪を登つて行くと、中折りも大分汚くなつた奴を眉深に冠り、銘仙とは昔を偲ぶ名ばかりのヨタ／＼になつた羽織が非常に淋しさうな色彩を添へて居る四十前後の男が失望して戻つて来た書生の前へ立ち留ると。

「失禮ですが、貴郎は此の御近邊のお方ですか」

不意に斯うした質問を受けると、書生風の男は眼を睜つて。

「何ですか……」

反問する書生も自分と同じやうに扮装の淋しい相手を迂散臭い眼で眺め。

「此の邊の者では在りませんが、多少は知つて居ます」

「左様ですか、夫れでは一寸お尋ね申しますが此の近所にエム商會と云ふのが在るのを御存知では無いでせうか」

此の質問を受けた書生風の男は淋しい片頬に微笑を浮べ。

「君ら亡者だね」

「何んですつて？」

「イヤサ君も新聞の廣告を見て此處までノロ／＼と出掛けて来たんだね」

同じ境遇に泣く哀れな男、書生は年が若いだけに可笑しくなつて来た、すると何か感違ひでもしたのか其の男は一寸頭を下げ。

「そ……そんなんです」と、答へると共に銘仙の男は眞赤になつた

「アハ、ハ、ハ」

書生は堪へ切れなくなつて遂に笑ひ出した。

九

相手の書生が胸中の可笑しさを包み切れずに笑ひ出すと、事情を知らぬ銘仙の男は至極大真面目で。

調査係つて云ふのが如何にも僕の嗜好に適して居るものですから一つ遊び半分に遣つて見やうかと思つて出掛けて来たのです」

書生は此の見當違ひの返辭を聞くと益々可笑しくなつて。

「君ッ、年の若い僕が斯んな事を云ふのは生意氣千萬だが」と、前置きをしてから。

「思ひ立つたことは何んでもやつて見るが宜いが、土臺エム商會なぞと云ふものは此の土地に無いんだせ君」

「わッ……」

銘仙君は思はず大聲を發して双の眼を睜つた。

「驚いたらう」

書生は相手の驚愕が想像より以上であるのを心の中で笑つた。

「驚きましたな、僕は寢衣を質に入れて電車賃とバットの代に宛て、モウ大丈夫

だと確信して此處まで來んですがね」

涙を流さんばかりに落膽する容子、今のセチ辛い世の中に白い御飯を喰べて黄色な肥料を製造しやうとするには裡面には斯うした惨めな事實もあるのである。

「遊び半分とは違ふのかね」

自分も失望落膽した一人であるが、モウ夫れを忘れたやうに、書生は却々に人の悪い皮肉を云ふ、然しそんな事でモウ顔の色を赤くする程の餘裕が無い銘仙君は。

「エム商會が此の土地に無いとはどうもひどい、實に人道上の大問題だ」

斯く憤慨した後、再び悄然として頭を垂れ。

「僕は今夜から寢衣無しで、薄い煎餅蒲團に包まつて」

可哀想に銘仙氏は泣き聲を出して居る。

「おい／＼そんなことを云つたつて始まる譯じや有るまい、僕は廣告を片ツ端し

から廻つて歩くんだが、どうも更に口が無いんだ、番町に留守番の中年者と、書生を一人置き度いと云ふ家が在るから一つ行て見なかね

夫れと聞いた銘仙君はベコリと頭を下げて。

「やア君、そりやだうも御親切に有り難う、いづれ先方へ落ち附いてから萬々お禮はします、ナニ君ツ、僕が極りさへすれば君もキツとどうかするよ」

早や自分が留守番に住み込んだやうな氣になつて居る。

「馬鹿に君は氣が早いね、寢衣が無くなるのも無理は無いよ」と、大きく笑ひながら。

「兎も角も出掛けやう」

促し立て、二人が歩き出したのを、態ざと悠り歩いて、擦れ違ひながら、二人の話に耳を傾けて居た眉目清秀の若紳士が在つた、が驚くべし此の紳士こそ根岸の奥に妖婦お良を圍まつて居る砂川欽哉であつた、さうして二人を遣り過として

一寸振り返つたが。

「矢張り、尋ねて来る奴が多いと見わる、今度からは何とか方法を代へんと不可ん、あんな奴に限つて派出所で尋ねるから、飛んだ處で足が附いては一大事だ」と、獨語して。

「しかしあの書生は却々緊りして居るらしい」

多數の部下を持つて、活動させて居る砂川は、流石に一寸した人間にでも細心の注意を拂つて居る。

やがて砂川は、阪を降りて電車通りに出で、右に曲つて三軒目、宿替移轉荷車運送移轉舎とペンキ塗りの大看板の出で居る見世へ入つた。

入らつしやいまし」

土間に居る堅氣らしい男の挨拶を背後に聴き流した砂川は、一寸其の男に目配せをした後、無言のまゝで奥へ通つた。

+

五間間口の太分手廣く營業をして居る移轉舎へ、言無のまゝでズウツと奥へ入つた砂川は。

「馬鹿に不精にして居ると見えて、此處いらわ塵埃だらけではないか、家に居る者は朝晩掃除をしなければ汚くてしやがないせ」

誰れに向つてでも無い叱言、夫れを見世で聽て居た若い者は。

「へい……」と、丁寧に返辭をした。

「本當に困る奴等だ」

茶の間へ上ると、ズカ／＼と勝手を知つて居るかして、誰れも居ない座敷の押入を明けた其の押入の中には本棚が幾段も在つて、一杯に金文字の背皮で製本も上等な洋書が並んで居る。

「ウム……」と、何か首肯た彼れ砂川欽哉は、其の右の端をカチリと、宛ら掛金でも外したやうな音をさせて本棚をグツと押すとスル／＼と本棚は廻つて、一人通れるやうに明いたのであつた、見れば驚くべし僅か一尺餘り本棚の裏は、押入れと見せては在るが其の實廊下に成つて、直ぐに二階へ昇る梯子に成つて居るのであつた。

二階はたゞ廣い二間と、隣りの家の二階を、二階だけ此方の物にした小さい間が二間ある。

其の廣い電車通りの方に總窓を取つた十六疊の部屋は、一間の二間宛に床と違ひ棚を取つて、床には大幅の書を掛けて、其の前の青磁の大花瓶に思ひ切つて大枝の白梅が、蕾を破つて馥郁たる清香を室内に漂はして居るのが二十輪程、一夜明して明日の元旦の景物として、此の家の主人が心を用ゐたものであらう。

違ひの棚の置物も、取り／＼に珍しい古器や茶器なぞが有るが、心して眺ると

金屬製の、何れ手頃に投げられるものとして誂へ向きの物が多いやうに思はれる。

夫れも其の筈、此の不可解千萬の家こそ砂川欽哉が悪事の策源地なのである、さうして今しも砂川が下の本棚の蔭の階段から昇つて、此の十六畳の室へ姿を現はした時には洋服やら羽織やら、思ひくりに仕度くした紳士風の男が六人、山のやうに起した大火鉢を圍んで欽哉を待て居たのであつた。

「お入乗なさいまし」

「首領入らつしやいまし」

一同は欽哉の姿を眺めると共にペコ／＼頭を下げた、すると彼れは一座を見渡して。

「皆んな揃ふたな」

斯ふ云ふて其處へ座つた砂川の姿は實に華族の後嗣たる威嚴が備つて、悠揚と

して迫らざる言語と舉動は誰れにも好かれるのが首肯れる。

「エ、皆んな一六人揃つて居ます先刻からお越しになるのをお待ち申して居りました」と、羽織袴の男が、今更のやうに一座を見廻した。

「御苦勞……」

一語きりであつたか、砂川の此の一言には誰れも彼れも頭を下げた。

「お前達を斯う召集したのは一つ骨を折つて貰ひ度いことが出来たんだ」
斯う語つた砂川は絹座蒲團から立ち出して。

「外でもねわが僕の娘を攫つた奴が有るんだ」

子を思ふ親の至情、砂川は膝の上へ露の玉を落した。

十一

新聞廣告で市内各所に在る部下の幹部六名を召集した砂川欽哉が、さう残念さ

うに悲憤の涙を流し。

「一つ骨を折て貰い度いことが出来上つたんだ、外でもねねが僕の娘を攫つた奴が有るんだ」と、語り終つて涙の面を落すと。

「ヘエー、それは事だ」

見當は附て居るんですか」

部下の六名は口々に云ひ合つて欽哉の面を覗き込むと。

「大概の見當は附けた、と云つて雲を掴むやうなもので本當に心當りなんだが

斯う云つて欽哉は百合子が攫はれたときのことを物語つた、新派俳優の重鎮江

井芳香がお歌を連れて來た時の光景やら、お歌が夢現の裡に物語つた顛末を落ち

も無く告げた。

「そりや厄介ですな、何しろ肝腎のお歌がそれでは」

顔を擧めて首を捻つたのは調査係の符牒で通る京橋署の刑事中川貞雄であつた

「一寸難問題ですが、で貴郎のお心當りと云ふのは？」

煙草の灰を落しながら、タイプライター事、中立新聞の社會記者として敏腕の

噂が仲間が高い行田彌四郎、號を香雲と云ふのが聴くと。

「實は斯うなんだ」

膝を進めた砂川は事件の振り出しを北越長岡にして、長野でお良の奪り合から

猿猴健次を密告した取り逃した顛末を落ちも無く物語つて。

「そんな理由が有るから、百合子を攫つたのは猿猴の奴が、打つた芝居だらうと

睨んだのだ」

神経鋭敏なる彼れは、我が想像した通りを物語つて部下の判断に任せた。

「有力な御判断です、なまじつか證據品などに頼るより、さう云ふ方面から方針

を立てるのが最も當を得たものです、しかし貴郎はごうして猿猴健次の奴を御存

知でしたな」

刑事の中川は、不思議さうな顔をした。

「ウン今云つた時のことで、新潟から新津まで例の募集係の野郎と一所だつたんだ、所が彼奴が妙なことから猿猴の奴を知つて居ると云ふがでね、僕も始めは半信半疑だつたが、何んでも彼奴を拘留してやつて、一日でも手の出されぬ隙に今の女を横取りしてやらうと思ふと、野郎風を喰つて逃げて仕舞つたんだがそれから考へて見るとどうしても僕の想像は違ひは無いと信じて居るんだ」と、云つて砂川が口を噤むと。

「さうです、確かに猿猴の奴が脚色んだ芝居に違ひありません」

調査係の中川は誰れよりも先きに然りと斷言した。

「へねそんな事が在つたのでございますか」

六人の部下が感心して居る中に、タツタ一人、寫字生の符牒で呼ばれて居る京橋加賀町の共進舎の筆耕で、裁判所の記録寫しを専門にして居る一柳勇作だけは

ギョツとして顔の色を變へたのであつた。

如何なる理由があるのか一柳一人のみがギョツとして顔の色を變へたのであつた。

十二

砂川が長野で塚本の猿猴健次を密訴した途一の物語は、部下の連中がいづれも好奇の眼を上げて聽て居たが、其の中の一人たる一柳勇作が俄にギョツとして顔色を變へたのは誰れ一人として氣の付いた者が無い。

「さうすると其の猿猴と云ふ奴は東京に居るんですな」

新聞記者の行田香雲は、興味の有る問題のやうに思ふので頻りに話頭を進めやうとして居る。

「極つて居るよ、君にも似合ないね、何んでも大きな仕事をする奴は、越後か北

海道でも乃至は滿洲でも、キツと中心を此の東京へ置くに極つて居るんだよ」

「御尤です」

刑事の中川は、行田と砂川の間へ言葉を挟んで。

「夫れで貴郎の仰しやつた猿猴健次の住家に、就て何かお心當りがお有りませうか」

流石は職掌柄である、其の質問は簡單でも要領を得て居る。

「有るツ」と、語尾に力を入れた砂川は膝を進めると共に一同の面上をチロリと

眺め。

「猿猴の野郎は、請負師の塚本次郎と名乗つて居るが、住居は神田榮町十四番地と云つた」

砂川はモウそろ／＼手配りの命令をするやうな態度であつた。

「あッ……在る、確に在る石の門柱に鐵柵か何か廻して、贅澤な構へをして居る

收金員の名で通つて居る男が斯う云ふと。

「夫れは何よりだ、一つ署の方から手を廻して見やうかしら」

中川は首領の砂川から、必らず左様しろと命せられるのを期待して居た、處が意外千萬にも急いで中川を制止した欽哉は。

「そんな何も皆んなに斯うして集つて貰ふ必要は無いのだ實は彼奴も以前を訊すと、歴乎として神田の米問屋であつた奴を、僕の父が良くない手段で踏み潰してこれを土臺に今日の地位を得たのだから、もしも下手な真似をしてペラ／＼と喋べられると夫れが爲めに籤を突いて蛇を出すやうなことになるんだ」と、欽哉は往時を追想するやうであつたが。

「彼奴も以前は堅氣であつたを、妙に悟りを開いて僕の一家を敵として呪ふよりも社會を敵として戦つて見ると云てあんな惡黨になつたのだから實際下手な行動が出来無いのさ」

欽哉は三寸の胸底深く秘めたまゝ平氣で暮しては居たものゝ、百合子を誘拐された爲め、其の取戻し手段を講じやうとする席上で、止むを得ず斯く打ち明けたものゝ、彼れとて性は善なる人の子であるから斯く思ひ出多き我が一家の傷？に觸れると、忽ち悄然として頭を垂れてしまつた。

宛然で一篇の舊小説ですな」

香雲が面白さうに口を出すぞ。

「散斬者なら新小説でせう」

斯んな事は幾ら云ふても差支へる所が無いから何とか口を利いてお茶を濁して置かなければ具合が悪いと、勇作が隙さす口を出した。

「アハ、ハ、ハ」

欽哉は殊更に大きく笑つて鋭き眼を勇作の面上に注ぎ。

「おい一柳君……」と一膝前へ乗り出した。

刑事の中川は二人の談話に耳を傾けた、行田香雲も双の拳を握つた、一座は何んど無の白け渡つた。

十三

勇作が妙な批評を試みると、夫れに對して首領の欽哉がサモ腹立たしげに哄笑した爲め、一座は忽ち白け渡つて廣い室内は可笑しな氣分が漂つた、がそんな事に頓着の無い欽哉は。

「君もハイカラに似合はない頭が古いネ、此の頃の文壇の趨勢は、もう筋を追つて行くローマンスを小説として取り扱はなくなつて居るせ」
此の言葉が終るから終らぬ中に。

「さうですお言葉の通り、陳腐な通俗小説は大正の新時代では要求をしなくなりました」

香雲が少しく反り身になつて合槌を打つたが、其の實文壇なんぞは様の遠い奴を、聞き囁りて何か附け焼刃の講釋を始めやうとする。

「ローマンズとノーベルの區別は、君編輯局でやり給へ」

中川はお家の大事と云はぬ許りに、苦がい顔をして横槍を入れる。

「では絞めるより外に方法は無いんですな」

誰れやらが事も無げに云ふと。

「まアさうだ、けれども今絞めたら手掛りが何にも無くなるせ」

斯う云ふことには中川が何んと云ても第一の知囊である。

此の時まで、双腕を堅く拱んで、何か深い考へに耽つて居た欽哉が。

「アハ、、、」

またしても大きく笑ひ出した。

「馬鹿な、馬鹿な……」

非常に昂奮しきつて吐く顔を、一同は驚いて見て居たが。

「だうなさつたのです」

「首領どうしたのです」

「何かお氣に障つたことでもございましたか」

流石は親分乾兒の盃をして、生れた時こそ違ふが、死ぬ時は共にと云ふ覺悟を抱いて居る彼等、欽哉の様子が變つたのを妙からず案じて居る。

「御無理は無い、唯つた一人のお嬢さんを攫はれたのだから」

鬼に等しい兇兒の群れにも佛のやうな魂は在る、部下六名の中で誰れやらが斯ら獨語した、すると欽哉は膝頭を一心に嘖めて居た顔を上げ。

「別にどう斯うと云ふのでは無いから案じて呉れるな」

一同を制して天井を仰ぎ。

「つひ自分の行爲を思つたらね、一寸真人間のやうな、良心とか云ふ奴が面を出

しをし始めたんだよアハ、ハ、ハ、

またしても大きく笑つてから。

「では斯うしやう、集金は猿猴の住宅を探る、調査は御隠殿の踏切番から調べ始める、タイプライターは例の桂庵廻りで何か手懸りを掴んで呉れ給へ、其の外の者は思ひにくに、然し三ケ日は何もするには及ばんせ」

「それではお嬢さんが」

「大丈夫、残念ながら僕の敵の猿猴健次は、そんな真似をするケチな男ではないんだ、サア是れで別れて呉れ、夫れから今夜の六時半に浅草の奥の常盤に集つて呉れ、大に吞まうから」

「さうです、吞む爲の我れくの努力です、吞んで抱いて、威張つて暮して行くのに入はどんな事でもする権利があるんです」

香雲が元氣よく云ひ乍ら起ち上つたのを先きに、一同はドヤ／＼と出て行く、

十四

勇作も續て出たが、思ひ／＼に分れ散る一同の行先を一寸見届けた彼れは歸る方の京橋とは反對に江戸川行の電車に乗つた。

仲間の眼を盗むやうにして、自分の歸る方とは正反對な江戸川行電車に乗つた一柳勇作、此奴も唯だの鼠では無いらしい。

「ヘン随分馬鹿にして居やがる」

彼れは斯う獨語すると共に電車を飯田橋で乗り替へ、萬世橋で舊外濠線の電車を降りると。

壁に耳が有り、障子に目鼻が在る世の中だから却々油断も隙きも成つたもんでは無ね」

斯う云つて前後左右を見廻した後ち、電車を降りてから眞ツ直ぐに御成街道を

北へ急いで居たが、急に右に折れると細い横町をば曲り曲り歩ひて榮町なる塚本組の前に佇立んだ、さうして再び前後左右に氣を配つて居たが、やがて裏手の入口から世間を忍ぶやうにしてソツと家の中へ入つた。

驚くべし砂川欽哉が股肱と許して居る六人組の一人、一柳勇作は塚本次郎とは戸籍に在る名で其の實は猿猴健次と云ふ世にも恐ろしい大賊の住家へ案内もなく入つて行つた。

「旦那は？」

戸の明いた音に氣が付いて出て來た頬の赤い女中は。

「御在宅ですわ」

豫てからの顔馴染と見わて女中は打ち解けて。

「まアお上りなさつたら可いでせう」

「難有う、夫れでは」

僕が急にお目に掛り度いことが在つて伺つたと申し上げて呉れ」

「あらさうですか、一寸お待ちなさつて下さい」

一旦奥に入つた女中は、直ぐに出て來ると今度は一寸頭を下げ。

「直ぐにお目に掛るさうですわ」

「さうか……何に直ぐに奥へ通つても構はないが親しい中にも禮儀と云ふことが在るからね」

「ほつ、御挨拶ですこと」

やがて奥の間へ通ると、其處には猿猴健次の塚本が一人で新聞を讀んで居た、否な彼の欽哉が掲げさせた暗號廣告をヂツと眺めて居た、夫れを眺めた勇作は部屋へ入ると共に、襖をピツタリと閉めて。

「親分……」と、息を喘ませながら。

「大變なことに成りましたせ」

大變と云ふ一言が耳に入ると、やをら面を上げた健次は。

「何だ馬鹿に惚てやがつて」

流石は全國に名の響いた大兇賊、猿猴健次は落ち付き拂つて居る。

砂川の若も、此處の大將も落ち付き居る處は能く似て居るな。

彼れは思はず斯んなことを口にした後ち、四邊りを見廻して聲を潜め。

「實は今日例の所でいつものやうに會合をしたんでさア、所が親分の推量に違はねわで百合子の事」と、中阪下の會合の顛末を落ちもなく物語つから些か膝を進め。

「何んですね募集係りと云ふ奴は、親分の飼犬ぢやなかつたんですか」

「そんな事は無ね」

健次は強いく自信が有るやうに首を振つて。

「砂川の野郎も大分大袈裟にやつて居やがるからな、然し俺の處では一旦盃を

した奴で、寢返へりを打つた者はまだ一人も出さねわのだ」

健次の此の一言は千斤の力が籠つて居た。

十五

猿猴健次が、深き自信のあるやうな一言を聴くと、今まで多少不安の色を面へて居た勇作は。

「御尤もです、夫れを伺つてやつと氣が晴れやしたよ、だけど御隠殿の踏切りから手を廻したら少たア手懸りが付きませんか」

健次はフ、ンと冷笑して。

現在俺れが大泥棒で、斯うやつて此家に居て、それでチャンと俺れん所と見當が附て居てさへ、小指一本さへ指すことの出来無ね野郎共が、御隠殿の一踏切りを叩き上げたつてどうなるもんか、ね、左様じゃアねわか」

斯う云はれると、勇作の面から不安の影が消れて。

「御尤ですな、夫れでは此のまゝにして置くのですか」

「其奴も面白く無ねナ、あの番人の家に學校盛りの娘が居るんだが、あゝした身の上では學校へも出せねねと云つて滴して居るさうだから、娘と一所に引き取つてやつて、野郎共を迷はして遣るのも面白いな」と、云はれると勇作は横手を打つて。

「面喰ひますな、早速やつちやアどうです」

「アハ、、、もう一昨日の晩の中に引ッ越して居らア」

「にッ……」

勇作は今更らながら猿猴健次に手脱りの無いのを驚嘆して。

「親分、夫れは本當ですかね、餘り手廻しが早いじやありませんか」

「ウム……」と、ニコ／＼笑ひながら軽く首肯した健次は。

「俺れは左様云ふ細い所へは氣が着かねね、と云ふよりはコセ／＼したことが嫌ひなんだが、今度盃をした海豹の五郎と云ふ若いのが、さうした處へ馬鹿に氣が注ぐんだ」

「さうですか、本當に宜い片腕を見付けたもんですな」

「お前だつて俺れの爲めには大切な片腕じやねねか」

健次は勇作の顔を眺めて笑つた。

「親分からさう仰しやられると本當に耻しいのです、何にしろ片腕が一本指程の仕事も出来ねねのですから」と、勇作は頭を掻いた。

「其の氣持が嬉しくて俺れが片腕に頼むのだ」

巧みに相手の心を唆つた健次は。

「兎に角精々やつて呉れ、さうして大仕事を一つしたら、何處か田舎へでも引ッ込む算段をするんだナ、お前なぞは迂つかり斯んな魔道へ迷ひ込んだのだから、

足さへ洗へば以前の善人だ、善人と云ふ奴になつて世の中が渡られれば是れ位結構なものなねえよ」

健次が染みくぐと斯う云ふと。

「今日は何んだか變な日ですせ、若も良心が面を出して困ると鬱ぐし、貴郎は貴郎で何んだか佛様の講釋のやうな事を云つて」

煙に捲かれたやうな勇作が妙な顔をする。

「おい砂川とは違ふせ、俺ア良心なんて奴に責められることは少しも無ねのだ、寄つて集つて俺達の一家をむざむざと踏み潰しやがつて仇を取るんだから當り前だナ、自分の欲が通されねわつて悪いことをするのは少しは違ふんだ、別に泥棒に理屈を附けるのでは無ねが、理由を云へば斯なものよ」

健次の眉は上つて、眼には燃え立つやうな熱が籠つて來た時、次の間に瀬戸物ががら合ふ音がしたと思ふと。

「良人、仕度くが出來ましたよ」

女中に酒の仕度くをさせた妻女のお藤は、ニコ／＼笑ひ乍ら入つて來た。

十六

酒肴の用意をして良人の居間へ入つて來た女房のお藤は。

「おや入らつしやいまし、暫く見ねませんでしたね」

笑へば深い片鱗、彼れは愛想好く勇作に挨拶をしてから。

「どうもお待ち遠うさまでした」

流石は其の昔花柳の巷に在つただけあつて、萬事に如才無く食卓を並べ始めた

「お内儀さん上る度び毎に御馳走になりました何んども相済みません」

勇作は窮屈さうに座り直して丁寧に頭を下げた。

「おほ／＼、我家へ來て貰ふ人はみんな宅の家内なんですから、他人行儀のや

うな真似をして貰つては肩が張て困るわ」

「はい恐れ入ります」

勇作は粹な中にも厚い／＼情けの籠つたお藤の言葉にしみ／＼感心して、此の婦人の爲めなら、假令火の中水の中へでも飛び込んで生命を捨てたとて決して惜しく無いと思ひ込んだ。

「何をそんなに堅くなつて居るのねわさア一つ……？」

差された盃を恐る／＼受け取つた勇作は。

「折角ですから頂戴いたしますが、今晚は社の忘年会が淺草に有るもんですか、どうか少しになさつて置いて下さいまし」

「さうか、左様云ふ理由なら正月にウンと呑んで埋め合せをして呉れ」

相手の言葉に首肯いた塚本は、自分も一つ呑んで。

「どうだお藤あの娘は」と、女房に盃を差しながら訊した。

「だうつてお前さん、あんなに可愛い娘つたら無いわね、それだのにあの婆の憎くたらしいつたら、やつと六つの子を捉まへて、それ水を持つて來い、それ其處を拭けつて、二た言目には打つんだもの傍で見居る私の方が涙が滴れるわ」

お藤は襦袢の袖で眼の縁を拭て。

「私あの子を是非貰ひ度いんですから一日も早く引き取るやうにして下さい、私今から行つて見やうかとも思つて居るんだわ」と、良人の同意を求めて居るお藤は、其の云ふが如く何處かに行く所と見えて餘所行の支度くをして居る。

「お内儀さん、何處かに子供衆が見付かつたのですか」

勇作は今まで塚本から聴いた言葉とは少しく違ふやうであるから、一寸解せぬやうな顔をして塚本に訊した、すると塚本は手の盃を勇作に差し乍ら。

「ウム、境の方に一人宜い女の子が有るつて知らせて來た者が在つたので昨日一寸行つて見て來てからその事ばかり云ひ通して居るんだ。

何氣無く斯う答た塚本は、目顔で何か不語の呷きをした。

「さうで御ざいますか、夫れは結構でございますな」

勇作は早くも塚本の無線電話に首肯してさも真ことしやかに答へた。

所がね」と、妻女お藤の顔色を窺ひながら。

「現在己れの孫だと云ふのだが、實に汚い姿をさせて、そりや酷い目に逢はせて居るのださうだ」

「本當なんですよ、私可哀想でくでならないんです？」

お藤はまたしても眼の縁を拭いた、何んと無く話が違ふので、塚本の言葉を首肯して居た勇作も内心では大に疑ひ始めた。

十七

勇作が塚本夫妻の言葉に對して大に疑ひを挾んで居ると、女房の顔をヂツと瞋

めた塚本は。

「泣くのは止せよ、大きな姿をして居て笑はれるせ、そんなら何か土産でもウソと買って持つて行つてやるさ」

良人から斯うした言葉を聞いた妻女のお藤は。

「わゝ……」と、さも嬉しさうなお藤は。

「友禪モスで、馬鹿に宜い柄が有りましたから、お正月の着物にしてやらうと思つて昨夜寝ずに大急ぎで縫ひ上げたんですわ」

我が心を籠めた着物を着る、姿を胸裡に描いて居るのか、人の宜いお藤は晴れやかな笑みを浮べた。

「本當に氣の早い女だなア、呉れるかどうか判らない他人の子をそんなにしたつて仕様が無ね」

「だつて貰つて呉れるんでせう、わ、お前さん」

お藤はまたもや心配さうに良人の面を眺めた。

「今日が今日と云ふ譯にも行くまいが先方では行末は藝者にでも叩き賣らうと云ふ量見なんだらうから、緩り掛らねじや駄目だ、まア年の内から精々手馴付けて置きねわ」

夫れと聽て安堵の胸を撫で下ろしたお藤は。

「そんなら私も張合が有るワ、それじやア行つて参ります」と云つてしとやかに頭を下げた。

「まアまた泣いて來るのも宜いや、時においちの外に力松も一緒に連れて行きなよ」

「わゝ、二人ともモウ仕度くが出来て居ますから一緒に参りますわ」

斯う云つて起ち上らうとしたお藤は。

「それでは貴郎御緩り子

「行つてしらつしやい」

「寒いから途中に氣を附けて行きねわよ、年の暮に風邪でも引いて來年へ持ち越すなんざア、餘り感心しないからなア」

「大丈夫だわ、懷爐を入れて居ますから風邪なんぞは引きませんよ」

一寸したことではあるが、良人の優しい注意を喜んだお藤は、いそぐとして此の部屋を出て行つた、すると其の後しる姿を見送つた塚本が。

「女と云ふものは、あんなに子供が欲しいのだらうか」

「夫れはさうでせう、別に御親類も無いさうでもから、行末のことを思ふと心淋しくなつて、腹を痛めないでも自分が育てた子供に掛らうとするのは婦人の情でせう」

「さうだらうか、然し是れから先き自分の子供が出来たらうとする量見なんだらう」

塚本は、まだ子を欲しがるお藤の心が本當に判らぬらしい。

「さうまで氣を使つては際限が在りませんや、お内儀さん御自身ではモウ子供衆が出来無いと思つて居るのに違ひありません」

「さうかも知れねなア」

塚本が勇作の言葉に首肯くど。

「時に其の娘と云ふのは一体どうしたのですね」

勇作が不思議さうに質問すると。

「ハ、此奴は海豹の計略でナ、と云へば海豹も呼んでお前にも逢はせて置かう」と云つて女中に向ひ。

「おい飯島君を此處へ呼んで呉れ」

「はい……」

女中の軽い返辭が聽れると、やがて高田爲吉の飯島が入つて來た。

十八

女中に呼ばれて、主人塚本次郎と一柳勇作が酒宴半ばに入つて來た高田爲吉の飯島は、勇作の面をチロリと眺めてから。

「やアお入來なさいまし」

軽く會釋をして其處へ座ると、塚本次郎の猿猴健次は、高田の顔を頼母さうに眺めた。

「御主人、何か御用ですか」

モウ純然たる東京辨に成り澄して居る高田、故郷の柳山に居た時に浮氣な娘子供に騒がれたと同じで、今でな玉川上水で産湯を使つた娘達が打つちやつて置きさうも無い小粹な青年に化して居る。

「別に改まつた用が在つて君を呼んだのでは無いが、斯うして一柳君も來て居る

ことだから一つあつさり飲らうと思つて君を呼んだのさ」

塚本は、取り敢へすと云つた形ちで爲吉に盃を差した。

「御馳走様です」

高田の下げた頭が上つた時、塚本は改まめて一柳を紹介したさうして二人の挨拶が済むと。

「時に飯島君、今一柳君の話に依ると砂川の野郎奴、俺れの所以だと勘付いたらしいが、君が引受けて呉れた境の方は大文夫だらうね

流石の兎兒にも多少の不安が在るやうであつた、すると豊頬に笑みを浮べた爲吉の飯島は。

「鐵の草鞋か、虎の皮の禪です、それに雀が餌に馴れてしまうのも、さう手間はかゝらないでせうから、さうなつたら又外に仕様も有るでせう」

全然り悪黨に成り済した爲吉は、實際塚本の片腕と信頼されて居るだけに故郷

で働さ者と推賞された知恵を、抜け目無く悪事に働らかせて居る。

「もし飯島さん、一体雀と云ふのは何のことですな」

勇作は不思議さうな顔をして爲吉の面を仰いだ。

「ハツ／＼君、雀と云ふのは百合子のことさ」

高田は吹き出したくなるをヂツと堪らへた、すると砂川の部下としては幹部一人で在る勇作が、

「では矢ッ張り境の子と云ふのは百合子のことなんですか」

「さう／＼と、高田は相手の迂濶さを心の中で冷笑した。

「それでは百合子は虐待されて居るんですか」

高田の返辭を聞いた勇作は、案外だと云ふ顔をして居る。

「まア左様さ……」

高田は飽くまでも平然たる態度を持続した。

「さう聴くと實に意外千萬の感があります、と云ふのは我れ〜が今日會合した席上で、砂川の言明した處に依りますと猴猴の手へ行つて居るなら、決して酷い目に遇はされるやうなことは無いから、其の點ばかりは親として大に意を安んずることが出来る」と云つて非常に賞めちぎつて居た位なのに」

「ハ、ハ、まだ若い君は」

高田は堪らへ切れなくなつたのか、遂に大きな聲で笑ひ出した。

「どう云ふことなんでしょうか」

二人の問答を黙て聽て居た塚本は、唯だニコ〜笑つて盃の數を重ねて居ると一膝前へ乗り出した高田は。

「君のすることゝ、僕のすることは違ふから、餅屋は餅屋で僕の方が斯う云ふ事に掛けては旨いのだよ」

初對面の時から、妙に言葉がこじれて角が立つたのを、夫れと氣の附いた高田

が急に世話に碎けて打ち解けたのであるが、相手の勇作も最初から高田の爲めに三寸の舌頭で翻弄されて居たやうに思つたのか、夫れとも他に腹に据へ兼ねることがあるのか。

「ナ……何んだと野郎ッ」

勇作は血相變へて怒鳴り出した、さうして右の拳を緊かと握つたまゝ高田の前へチリ〜と詰め寄つた。

十九

高田の態度が氣に喰はぬか、今まで温和しかつた勇作は、双の拳を握つたまゝ「ナ……何んだ野郎……」と、絶叫して詰め寄ると。

「一柳君、僕の言葉には角があるから或は君を怒らせたか知らないが、決して心あつて云つたのでは無いから悪く取らないで呉れ給へ」

風に柳、高田は巧みに相手の鋭鋒を避けた、するとまだ心の解けぬらしい一柳は。

「そりや僕は砂川に買はれて、裁判所の記録寫しを幸に、是れはと思ふ目星しい事件の内容を知らせるだけの役目をして居たのが、ヒヨツとした具合で御當家の親分の御厄介になつてからまだ間が無いのだから一向お役に立たぬのが當り前で君のやうに片腕と頼まれる丈の野郎でも無いが、然し僕は親分の御厄介になつてから少しも陰日向はしない積りだ」と、云つてまだ息を喘ませて居る。

「おい君は餘程どうかして居るやうだね一柳君」

高田が驚いて聲を掛ける。

「俺れが眞面目に辯解をして居るのにどうかして居るとは何んと云ふ言ひ草なんだ」

勇作が益々怒ると、今まで沈黙を續けて居た塚本は。

「おい、二人して詰らぬことから内輪喧嘩をしては困るじやないか、なア一

柳君、君は飯島の云つたことに對して感違ひをして居るんだ」

「さうなんです、感違ひをされては僕だつて大に困ります」

高田は塚本の言葉に首肯した後ち一柳の面をテロリと眺め。

「唯だ斯う云ふ仕事には俺れが向くと云つた丈けよ、君、雀を捕つたことが有るか

かね

簀から棒に雀を捕つたことが有るかと聞かれて、流石の勇作も握つた拳と思は

ず解いて。

「無いことも無ねが」

些さか面喰つて彼れは高田の面上を穴の明くほど眺めた。

夫れでは飼つたことが有るのかね一柳君」

有るけれども、いつも餌が附かないで死んでしまふから駄目だ」

高田に釣り込まれた勇作が斯う返辭をすると、ニッコリ笑つた高田は。

「それだよ、僕は夫れから思ひ附いたんだ」と、語つて其處に感心して聽に居る塚本と一柳の面を見較べ乍ら。

「つまり虐待すると云ふのも、百合子の爲めなんだよ、あの雀と云ふ奴は、捕つた當座の二三日、籠に何か被せて眞ッ闇にして何も喰はせんで抛つて置くのだ、すると奴さんが腹が減つて堪らなくなつた頃、人間が少し宛餌を遣り遣りすると必ず餌附くと極つたものだぜ」

意味の深い高田の言葉、夫れを感心して聽て居た一柳は。

「成程、さうすると、詰り百合子が可愛いので當分の間虐待するですね」

「さうなんだ」

大きく首肯いた高田は。

「判つたかね君……」

「判つた……」

二兎の面には薄氣味悪い笑みが浮んだ、一人塚本のみはニコ／＼會心の笑みを浮べて居る。

二十

北へ田無、南へ調布を控へた所だけに便利なやうなもの、三多摩壯士で有名な、否な小金井の櫻で有名な境驛と云ふ所は、人家が唯つた五十ほど、暗に咲くお白粉の花が二三人、怪し氣な料理店に生きては行くもの、一年三百六十五日の中に櫻時以外には眞ッ度く詰らぬ寒村と云つても宜い位の所だ。

其のつまらぬ村なので停車場から眞ッ直ぐに續く田無街道の左側を、停車場から五六軒目、此の驛で驛前の料理屋と旅人宿兼帯の家を除けば、一番大きな内で見世は板場で、今でこそ戸を閉めたしもた屋だが、其の以前はどうやら米屋でも

して居たらしい、内に勝手の外は十八疊が二室で、両側に拭き込んだ廊下が通つて居ると云ふ、妙な構へは、蠶室に直ぐ代用が出来るといふ爲めだと領かれるが天井も長押しも、木口を選んでの普請は、一寸腑に落ち無いやうにも感じる。殊に是れほどの大きな家に住む主は五十五のお婆さんが、唯つた一人限りと云ふと、だうやら物語りめくが、此の婆アさん、年こそ五十五と云ふが齒は一本も脱けず腰も曲らないで、朝から晩まで界限三四里四方を廻つて家作の賣買より田地抵當の金融よし、絹の約束よしと軽い口一へで相當な金儲けをしては、歸つて來れば本場の琉球泡盛を大洋盃で二三杯は呷らうと云ふ奢り者、さうして此の家は今年二十七になる息子に乳を吞ませながら、先の亭主に死に別れた翌年、小金を貸す隣村の某に建てさせた専らの評判でお美代婆アと云へば、あゝあの飲たくれかと、遠く府中まで知れ渡つたものだ。

其のお美代婆アさんが、四五日前に娘を一人貰つたと云ふので、近所の者が覗

いて見ると、是またどうしたのだらう、此の邊りには見ること出来無い美しい子だ。

「お婆さん、宜い金箱べね見付けたいなア」

お美代婆アと云ふ名で通つたけ、近所の者も察しが宜い。

「あーにお前……」と、近所の内儀さんをチロリと底光りのする眼で眺めてお美代婆アさんは。

「此の餓鬼は、若い盛りに出來て里流れになつて仕舞つた娘の子で、音信不通になつて居たが、斯んな厄介者べね押し付けられたいよ」

「へね……」

近所の内儀さん達は、さも意外千萬と云つたやうな顔付きをして。

「婆アさんに娘が有るつて、俺らアはア初耳だんべわ」

またしても内儀さん達は眼を睜る。

「豪い話でも無わだから、それがお前、横濱で死んでしまつてなア」

「あーれまア、夫れで送られて来ただなア」

近所の金棒曳きは、口先きばかりは同情に富むだやうな言葉を變けた。

可愛い孫でありやア、お前捨てられもしないに、育つてもこれが大きなるまでに
は俺らア十萬億士へ行つて居るでねわか、本當に厄介千萬な餓鬼だつたら有りや
しねわ」

で、此の厄介者を使ふだけ使はなければ、差引勘定が合はぬと云ふ算盤を弾て
居るのか、まだいたけな小娘に水を汲め、部屋を掃除しろと、情け用捨も無く使
ひ立てるのだ。

此の憐れな厄介者こそ、爲吉の飯島が傳手を辿つて預けた百合子なのである。

二十一

谷中の墓地附近で惡漢の手に誘招された世にも憐れなる百合子は、夢に夢見る
やうな數日を送つた、母と慕つたお良を思ふ隙きも無く乳母のお留や女中のお歌
を思ふ隙きさへ無く、現在の恐ろしい鬼婆アの苦の苦しみだけを現實に覺わて、
唯だおろくと泣く隙きも無ければ叫ぶ暇も無い。

「お時ツ……」

百合子と呼ぶにお時ツと吐鳴つた鬼婆は、脂の詰つた長煙管を手にしてキツと
睨み付けた。

「は……はい」

部屋の隅に小さく成つて座つて居た百合子は、思はず知らず首を縮めて蚊の鳴
くやうな聲を出した。

「こゝへ來なツ」

ガミ／＼吐鳴り散らす大きな聲は、街頭を通る田無へ通ふ客馬者の御者の耳に

も入つて。

「あゝまた鬼婆が濁酒に酔つばらつて我鳴り立てゝ居やがる」

振り上げた藤の鞭

瘦せ馬は悲しさうな聲を立てゝヨタ／＼と歩いて行く、其の鬣に秩夫風の粉

雲がチラ／＼と降り掛つて此處武藏野の冬枯れは身を切るやうに寒い。

「お時ッ……」

お美代婆アさんはまたしても大きな聲で吐鳴つた、が先刻から魂いも身に添は

無いでブル／＼震へて居た百合子のお時は、鬼婆アの權幕に怖ち恐れて居るから

「は……はい……」と、返辭はするがお美代婆アさんの許へ起つて来る勇氣は無

い。

「おいッ……」

再び家まで聴こゆるやうな大きな聲を出してお美代婆アは。

「此處へお入來……」

「……」

小さな鈴を並べたやうな双眼に、涙を一杯溜めて居る百合子は、どうしても起つて来る勇氣が出ない。

「來ないんか」

「ムラ／＼と立つて来る疥癩聲に怖へた百合子が。

「御免なちやい」

どうなる事かと楓のやうな両手を突いて詫びるど。

「誰れがお前に詫まれと云つたい、旋毛曲りッ」

ツカ／＼と寄り添つたと思ふと、情け用捨 荒鷲が、小雀をば捕ふる如くに百

合子の襟髪を掴んでブル／＼と自分の足許へ引寄せた。

「お前は、どうしても私の云ふことを利けないのかね」

「御免なちやい乳母や……」

「また乳母やなんて吐かしやがる、さうして一度云ひ聞かせたことを忘れてしま
うのだよ」

ビシヤリ、雪のやうに白い、玉のやうに丸らかなお臀に用捨ら無く皺だらけの
掌に力が籠つて觸れた。

「御免なちやい乳母や」

お留を呼んで居た口癖は、まだ西も東も定かに知らぬ百合子には無理が無いの
である。

「あら又……」

またしてもビシヤリと百合子の臀部を打つて。

「お婆ちやんと云は無いと殺して仕舞ふぞ、本當に覺わの悪い奴だ、さア云つて
御覽ッ」

憐れや猛鷲の前に小雀よりも猶頼り無い百合子は。

「おばーちゃん」

絲より細き聲ながら、殺されると云ふ恐ろしさに、其の言葉尻りには力が籠つ
た、折り柄表の方に當つて。

「御免下さいまし」と、優しい女の聲を出して來訪した婦人客がある。

二十二

鬼婆アのお美代が、いたいけなる百合子に對して到底人間の皮を被りたる者で
は夢にも出來ないやうな呵責を加へて居る時。

「御免下さいまし」

優しい聲と共に表へ美しい女が停立んだ、すると其の聲を小耳に挾んだお美代
婆アさんは、ギョツとして聲する方を振り返つたが、忽ち薄氣味の悪い笑みは兩

の頬へ浮んだ。

「お婆アさんと云ふのを忘れると、其の度んびに是れたよ」

一捻り肩のあたりを捻り上げると、今度はまた大きな聲で、取つて取けたやうに。

一本當に濫太い餓鬼つたらありやしない、幾らなんでも二度か三度云はれたら忘れる奴があるかい俄に恐ろしい聲で吐鳴られた百合子は、遂に堪まり切れなくなつてワツと泣き出した。

「もつと泣け、もつと近所に聴ゆるやうに大きな聲を出して泣け」

何んと云ふ冷たい言葉であらう、お美代はさも憎くさげに斯う絶叫すると共に又しても、ビシやりくと平手は所嫌はずに落ちる。

「御免ちやーい……」

「御免下さいまし」

門口では焦立つやうに呼ぶが、夫れが聴わたか、聞わないのか。

「もつと泣け、ど濫太い餓鬼奴、穀潰しのたばり損いッ奴」

ビシヤリつと、此の時婆アさん、實は我が掌を打つたが、外に佇立んで居る者には四十二骨へ喰ひ込むほどに痛ましく響いた。

「御免下さいまし」

今度は表で男の聲がした、けれどもお美代婆アさんは依然として可憐なる幼女に對して、冷酷無情の暴言を加へて居た。

「御免下さいまし、聞かせんか」

「自暴に大きな聲を出すぞ。」

「へい……」

始めて氣が附いたやうに、キョロンとした顔で。

「居ります、お入來なさいまし」

門口に立て居たのは、塚本次郎と名を偽る猿猴健次の女房お藤と、お藤が氣に入りの女中お市と、それに健次の子分である力松であつた。

起つて表の潜り戸を開けたお美代婆アさんは。

「これは入らつしやねまし、一寸も聞かまされねで、そらア不調法をしましてだア、さア此方へお上りなされませ」

關東訛りの聞き憎い言葉、さうして黄色な歯グキを現はしてニツと簿氣味の悪い笑みを浮べた。

「失禮をします」

待ち兼ねて居たお藤は、氣も座ろに通れば、恐しかつた鬼婆アの呵責にまた泣き止まぬ百合子の姿が直ぐと眼の前に現はれた。

「だうしたのお時ちやん」

お藤は懐かし氣につと走り寄つた。

「叱られたの……ね、お婆ちやんに叱られたのよ」

お藤の面を生佛のやうに仰いた百合子の双眼から、またしても露の玉が、ハラハラと散つた。

「さう、私かお詫びをして上げるからもう泣くのでは在りませんよ、サア顔を拭いて上げませう」

生みの母のやうに優しい言葉、百合子は急に悲しくなつてまた泣き出した。

二十三

荒くれ男に擔がれて谷中を後とにしてから、知らぬ土地を散々俾に揺られて斯んな淋しい寒村へ連れて來られ、擧句の果が毎日鬼のやうな老婆に責め苛なまれつゝ、此世からなる地獄に居るやうな日を送つて居る百合子は、一昨日一寸來て優しく慰めて呉れた綺麗なおばさんが、今日も不意に訪れて來て過ぐる日よりも

優しい言葉を掛けて呉れた爲め、子供心にも百合子は百万人の味方を得たよりも嬉しいのであつた。

「明日はお正月ですよ、泣くとお正月が逃げて行つてよ、判つて、伶俐だわね時ちやんわ」

甘い、噛んで含めるやうなお藤の言葉は、どの位百合子の心を落ち付かせるか判らないのである。

「あたいい、エツ、エツ、泣く、泣くのはね、エツ」
泣きじやつくりで物が充分に云ひ得ぬ痛はしさに。

「あら可哀想さうにと、心の中に叫んだお藤は當の本人よりも辛い思いがした、チツと堪へて居るがいつかしか、双眼より溢れ出づる熱涙は、百合子の林檎のやうな頬に落ちて、知らずくの裡に轟々と抱きしめた。

「奥様、お茶べね召し上れ」

薄氣味悪くニヤリ／＼と笑つたお美代婆さんに溢茶を進められると、ハツと氣が附いたお藤は、流石に耻しいと見えて美しい面を眞赤にして。

「まア是れは」と、慌て、頭を下げてから。

「子煩悩なもんですから、遂に御挨拶も忘れまして何共相済みません、夫れに一日は飛んだ御厄介になりました有難うございます」

斯うした丁寧の挨拶を上ので聴て居たお美代婆さんは。

「なーに飛んでもねねお前様、なーにもお構へしねではア」

是れがお美代の挨拶で、丁寧に頭を下げたお藤に對して、頭一つ下げて返すでも無い。

「これッ、お客様に座布団べね持つて來ねだか」

挨拶する間を膝から下ろされて、お藤に寄り添わて坐つて居た百合子は此の一と聲にサツと顔の色を變て。

「はい……」と、答へて起ち上ると。

「まア……」

餘りの冷たさに流石のお藤も呆氣に取られて居たが。

貴女モウ結構ですわ

お藤は、斯うして百合子が働かされるのが見るに堪へ無いのだ、生來子煩惱の

お藤には、此のいたいけな光景を黙つて見て居ることが出来無いのだ。

「わゝ癖になるだアネ、早くしないかお時ツ」

ピリ／＼と右の手に握つた長煙管が顫へる。

「はい……」

主客の顔を窺つて居た百合子は悄然として起ち上つた。

「早くしないか此の餓鬼ツ」

「は……はい」

チヨコくと次の部屋へ走つて行つた百合子は、やがて薄汚い座布団を携へて来た。

「おばちゃん」とお藤の前へ勸めると軽く首肯たお藤は。

「おうお伶俐なこと、おばちゃんが御褒美を上げませうね」と、云つて起ち上る

と、入り口に待たして置いた女中お市の手から大きな風呂敷を受取つて以前の席

に座つた。

二十四

可憐なる百合子に對して、御褒美を上げませうと云つて起ち上つた塚本の妻女

お藤は、上り口に待つて居る女中お市の手から大きな風呂敷包みを受取つて以前

の席に就いた、けれども此の風呂敷包みの中に何が入れてあるか、お美代婆アさ

んも見返りもしなかつたが百合子も他人の物に對して別段に眼を睨つて見入るや

うなことはなかつた、けれどもやがて、其の結び目を解いたお藤から。

「是れはネ、明日からお正月に着る時ちやんの衣服よ」

斯う云つて取り出された物は、燃ね上るやりに緋の勝つた、友禪モスの振袖一襲ねではあつた！

お美代婆アさんの家へ連れて來られた時、何處で剃ぎ奪られたのか、根津で着て居た美しい着物とは、到底比較やうも無い、黄縞木綿のゴス／＼ものであつた

「おばちやん、是品あたしのお衣服なの？」

流石に子供の心を引き付ける美しい衣服、其の喜びは包み切れぬらしい。

「さうですわ時ちやん、どれ一寸着て見ませうか」

「はい……」

云はれるがまゝに立つて、寄り添ふ百合子を、グル／＼と帯を解いて、衣服を脱がして見ると、これは又、肩と云はず背と云はず、幾所かに、白い肌にくツ

キリと、呪ふやうにも物凄しい疣の紫色が、幾分の血色を加へて、浮び上つたやうにもある。

「あれーッ……」

思はず知らずお藤が絶叫した時。

「どうしたんです」

其の聲に驚いてバラ／＼と飛び込んだのは、お藤の同伴て來た力松とお市の二人であつた。

「なアにね、今彼所の長押の上で鼠が私の顔ヂツと睨んで居るんだもの本當に驚いてしまつたわ」

さそくの機轉、二人の前を巧みに胡魔化したお藤は、流石に花柳界に幾年かを送つたことが俤ばれる、が俄に氣の付いたお藤は、我が膝に縋り附て、眞ッ裸体な百合子の寒さうな姿に氣が付くと。

「まア御免なさいよ時、ちやんおう可愛さうに」

手早く着せた肌襦袢、長襦袢、それからそれへと、細い婦人氣で意を籠めて仕立上げた衣服に、何の手落ちの有らう筈が無い。

「有難う」

キチンと被布まで着て、斯う袖口を押へて、パツと、手を伸ばして、首を傾け乍ら、可愛い眼で衣服の柄を見入る百合子を、惚れぐと眺めて居るお藤も嬉しさうだ。

「熱く似合ますな」

力松は柄にも無いことを云つて百合子の姿をヂツと眺めた。

「本當にね」

お市も負けじと合槌を打つ。

「柄が餘り派手では無いかと思つたが仕立て見るとさうでも無いわね」

「なんで奥さん、よくお似合ですわ」

斯う云つてまた見入るお藤にお市、日が暮れても夜が明けても飽きさうも無い抱つことをしませう」

「抱つことをしませう」

お藤が両の手を出すど。

「はい……」

ニツコリ笑つた百合子が、お藤の膝の上へ乗らうとすると。

「あんだ、こーれ、一寸優しいことを云はれると、モウ宜い氣になるだ」

落雷一つ、さつと顔の色を變へたのは、百合子よりもお藤であつた。

二十五

赤い血の通つて居る人間では、到底口にするこの出来な冷たい言葉、お藤も驚いて顔色を變へたが。

「まア……」

女中のお市も我れ知らず大きな聲を出して双の眼を睜ると。

「わッ……」

力松も右の拳を握つてデリ／＼と膝を進めた、すると目顔で夫れを制止したお藤は美しい面を上げてお美代婆アさんに向ひ。

「餘計なことですけれど」と、聞き直つて。

「餘り苛めるのは、子供のしつけに善く無いやうですが、見れば斯んなにお可愛いお子さんを……」

佛性のお藤には是れ以上の文句が無い、まだ云ひ度いのであるが、日頃から氣の優しいお藤とは思つて居ることの十分の一も口へ出すことが出来ないのであつたすると江戸ツ子のお市はもどかしく堪らないので。

「お内儀さんは氣がお弱いから駄目なんですわ」

横合から斯う口を出して。

「お婆アさん、本當に情け知らずだわねお前さんは」

相手の機先を制さうと頭から一喝を浴せると。

「あーに……」

フ、ンと鼻先きで冷笑したお美代婆アさんはお市の方へ向き直つて。

「餘計なことだよ、あーんだネ人の子に、勝手に着物を着せたりなんぞして頼みもしなわお節介を焼いた上に、俺らにまで喰つて掛かる法があるだか無ねだか」

お美代婆アさんの逆襲は頗る猛烈であるが、お市はそんな言葉に怯むやうな婦人では無かつた、女中こそ勤めて居るが、彼れの五体には人に負けることが嫌いな江戸ツ子の血が傳はつて居る、四十二の骨々には江戸ツ子の魂が宿て居る、彼れはお美代婆アさんの言葉が終るか終らぬ中に。

「何んだつて、法も糞も有るものかね婆ア、鬼婆ア、皺苦茶の我利々々婆アめ、

棺桶に片足突つ込んで居たら、宜い加減にお念佛を唱へろツ」
是れまで云つたら少しは怯るだらうと思つて居ると。

「あーんども云ふが宜いやな」

軽く受けたお美代婆さんは、手にせる長煙管に莩を詰めながら。

「お前等があゝ云はると、此の子は俺らアの子で、お前等が歸つた後どになつて、お前等の云つただけの事をしてやらア俺らアの腹癒せが出来るだーよへッ、>>>」

此の一發は應わた、お市も流石に二の句が出なかつた。

「もし、此の女は生れ付き口が悪くて困つて居るんですが、どうぞお腹を立てないやうにして下さいまし、私から幾重にもお詫びをしますから」と、お藤が頭を上げた時。

「お内儀さん、抛つて置きなさい、わつちが宜いやうに話します」

グツと一と膝乗り出したのは、先刻からヂツと堪わて居た力松であつた。

「まあそんなに可愛い子なら、あそこの角の料理屋にでも連れて居つて御馳走をしてお遣りなさい、俺つちが人質に残りませア」

力松が斯う云つたのを聞いたお美代婆アさんは、落ち込んだ縁の黒い眼の玉が溶けるやうにニヤリと笑つた。

二十六

力松の口から、何か意味在り氣に料理でも御馳走して遣れと云はれ、夫れと氣が着いたお藤は。

「成る程宜い所へ氣がついて呉れたわ子、そんならお前は残つて居てお呉れよ、歸つてからお前の分はドツサリ上げるからね」

斯う云つてお美代婆アさんの方へ面を向けたお藤は。

「夫れでは失禮ですが、お婆アさん時ちやんを一寸お貸しなさつて下さい」
軽く頭を下げながらも、今までの態度が態度であるから此の老婆が快よく百合子を貸すかと思つて居ると。

「夫れは構はませしねわ、ウンと御馳走をしてやつて下せわ、さうすれば此の餓鬼の分が一食助かるだから」

「夫れじやアお市お入來」

飽までも憎くくしいお美代婆アの返事を聴くと、流石のお藤もヒタと呆れて

二の句が出ない。

「では行つて参りますよ」

「行つていらつしやいまし」

力松の言葉を背後に聴き流したお藤は百合子の手を曳いて分て行つてしまつた

「おばさん、馬鹿に芝居は上手だナ、此の分なら槍舞臺を踏んだ千両役者と云ふ

格だ」

力松は俄に態度から言葉使まで打ち解けて火鉢の傍らに寄り進んだ、するとニアリと笑つたお美代婆アさんは手にせる長煙管をボンと叩いて。

「馬鹿に旨いと云ふが、俺れだつて鬼でも無ければ蛇でも無ねのに、心にも無ねであの可愛い子を苛めるのは、本當にハア一通りのことじやア無ねのだよ」

「其の代りにはお禮はウンとするよ云たじやねわか」

果然、高田爲吉の飯島から手が廻つて、此の老婆と力松は一つ穴の狐なのあつた。

「あーんのお前、お前の頼みが無ければ、百萬兩の金を積んでも厭やたらよ、もうお前息子が立派に三十圓からの月給取になつたやに、此の上の罪を作つて金べね儲けずとも樂に寢酒を飲んで行けるだアよ」

此の一言を聴いた力松は、ニヤリと笑つて。

「どうも不可ねわや、俺らア始めて可愛がつて貰ふんだからね、そんなに云はれると知らず……の間に有頂天になつてしまはア」

「お前こそ口べら旨くつて仕様が無ねだよ本當に、何にしる五十四になつた婆アを迷はすだからなア、斯う云つたら怒るか知らねわが罪な男だ」

お美代婆さん、モウ眼も鼻も無い、二人の談話は時計の針が進むに従つて段々怪しくなる。

「夫れはさうと、あのお時の餓鬼はもう我家のお内儀さんに馴染んで來たやうだな」

「馴染まずには居られねわやうにと云つて、お前とあんどか云ふ、俳優やうな男の頼みでねわか、俺らアお前の爲めに斯んな鬼のやうな婆アさんに成つてしまつたや」

流石にお美代婆アさん、自分の行爲を良く無いとは知つて居るやうだ。

「済まねわナ」

ペコリと頭を下げた力松は。

「其の代りの御恩返へしはお前の望み通りに俺れだつて、チャンと先きぐの量見まで極めて居るのだ」

力松は横を向いてペコリと舌を出したが、お美代婆さんは夫れを知らなかつた

二十七

乙に溺んだ謎のやうな力松の告白を聽いて居たお美代婆アさんは忽ち眼を細くして。

「そうかね、本當かね」と念を押してから。

「お前さへ、さう云つて呉れりや俺らはアもう此の世の中に思ひ残すことは無ねのだ」

五十四と云ふ白髪の手前も、戀か色か、兎も角も力松の前に出てはからきしい意
久地が無い、双の眼が怪しく輝いたと思ふと、色の褪せた口許の締りが解けて、
剝げかゝつた鐵漿の色の不氣味な齒がチラ／＼と出る。

「けれど、おばさんも餘ッほど物好きなんだね」

「何にがだね」

「何がって……」

力松は殊更に素知らぬ振りをするのであつた、するとお美代婆アさんは一寸衣
紋をつくつて。

「考へても見ろいな俺らア此の北多摩で境は愚か何處へ行つても男優りと云はれ
て今でも通じて居るんたア、其の男優りつて云るれる女は、一生涯男を絶つてし
まふか、男を喰ひ潰すか、ごつちかでなければ駄目だアな」

「へね、そんなものかな」

喰ひ潰される海豚の力松、不氣味千萬なこと夥しいが、もど此の婆アさんか
ら賭博の資本を貢いで貰つたことから考へても、決して悪い顔は出来無ないので
ある。

「夫れはさうと、もう徐ろ／＼あの餓鬼を我家の方へ引き取つても宜いだらうナ
俄に氣を變へて百合子の一身上に話頭を進めると。

「さうして貰へば俺らア助かるが然し善し悪しだ」

「何故……」

「何故つて……」

五十四の婆アさん遠慮會釋の無い敏苦茶面に一寸申し譯けの赤見がさして來た
が

「あの餓鬼が俺らア家に居なくなつたらお前はモウ來なくなるだらう」

「チエツ、戯談ばかり云ひツこ無しだせおばさん」

力松は婆アさんの一言に恐縮して頭を掻いた。

「そんな事が有るもんかな」

「いや左様で無い」

婆アさんは力松の腹のドン底まで読んで居るとは云はぬばかりに。

「だつてお前は、いつかお手入のあつた時に、小金井を逃げて東京へ突ッ走つてから、丸三年の間と云ふものは一寸も顔を見せ無かつたじやねわか」

「さう云はれると、大層俺れが薄情のやうだが、餘焰の醒めるまでは足を入れることの出来無い身の上だ、さうしておばさんだつて其の間に腹散々浮氣をして居たと云ふから五分五分じやねわか」

「あーに俺らア浮氣しただよ」

悪女の深情けと、老婆の浮氣沙汰は嘔吐を催さす程不快だ。

「まア宜いやな是れから再三出掛けて来るから邪魔にしたり留守をつかつたりし

ないでお呉れ」と、一旦言葉を切り。

「夫れでは正月早々あの子を迎へに来ることにしやう」

「その方が宜いだ、其の代りにお前は今の言葉を忘れてはならんねわよ」

「大丈夫だ、俺れだつて立派な男一疋だ、齒から外へ出したことを後とへ退くもんかな」

「旨いな、其の口で若い娘ッ子を迷はすのだらう」

またしてもお美代婆の双眼は怪しく光つた。

二十八

白晝は紙鳶の影、羽子の音、夜は謠の聲、歌留多の歌、斯うした平和な賑かな正月は根津の奥にも萬遍無く行き渡つて居るが、妖婦のお良の宿は、お良の嘆聲と、病床に在るお歌の呻き聲の外には、寂として火が消れたやうな有様である、

勿論砂川欽哉と醫者を除けば、来る者は八百屋、魚屋、蕎麥屋、料理屋、斯うしたものの許りで、活花、點茶、三味線、琴なんぞの師匠も顔を出すが、家に重い病人が在るから笑ひ興する事も出来無いし、又外、夫れぐの書き入れの御出入先きの有る連中ばかりで、一と通りの口上でサツサと引き上げて行く。斯うした氣の滅入るやうな淋しい中に三ケ日が過ぎて、今朝は七草の粥を味も無く啜つた。

「ねね奥様、一体どうしたと云ふので御座いませう」

日頃樂天主義の女中お留は暮れからの出来事で此の正月は好きな酒に酔ふことも出来無かつた爲め今日此の頃では全然り氣を腐して居る。

「本當に厭やになつたわね」

流石のお良も知らずぐの中に溜息が産む愚痴が出る。

「百合子様が斯んなことになつた許りで斯んなお正月を迎へたり、今日此の頃の

やうな惨めな有り様に成つたと思ふと、私、本當に攫つた奴の横ッ面へ喰らひ附いて遣りたうござんすわ」

お留は氣がむしやくしやすめるのか、斯う語り終ると共に手にせる銀の煙管を長

火鉢の縁を自暴に叩いた。

「妾も……」と力の無い返辭をしたお良は。

「百合さんを悪い奴に奪はれてからと云ふものは、どうしたんだか少しも氣が浮かないわ」

淋しい笑みと力無き聲、美しいお良の面は年を一つ取つてから凄艶を加へて来た、心の裡に大きな憂いがある爲めか、濃艶であつた妖婦の面上には凄味が加はつて来た。

「本當にね、何時になつたらお嬢さまの御行方が判るのでせう」
主従の談話は理に沈んで、ともすれば涙を呼ばうとして居る。

「一体若様も意久地無しだワ、心當りが附いたら、御自分の子ぢやア無いか生命に賭けても奪り返へせば宜いのに夫れをしないのなもの」

生來負けることの嫌いなお良は、水晶を並べたやうな咬い歯で下唇を噛みしめた。

「私だつたら出刃庖丁を持つて飛び込んで行きますわ」

お留も百合子の身を案じて居るのか女ながらも非常に憤慨して居る。

「夫れでね、是れは私一人の考へだが若様一人を頼りにして居るより、一層のことあの猿猴の奴に相談をして見やうと思ふが、お前の考へはどうだね、外のこと違ふから遠慮の無いことを云つてお呉れナ」

「成る程ね」

良いところへ氣が附いたと云はぬばかりにニッコリ笑つたお留は。

「夫れが宜しうござんしう、あゝ云ふ者は却々仲間の交際が廣いから思つたより

も早く判るかも知れません」

二人が百合子の噂さで持ち切つて居る時、お良の家の軒下へ佇立んだ一個の黒影が。

「おい……」と、聲を掛けたが、話が夢中になつて居る二人には、夫れが耳に入らなかつた。

二十九

お良の家の軒下へ佇立んだ男は、二重廻しの上から絹綾の襟巻で面を隠して居る、さうして濃茶ソフトの中折れ帽を眉深に冠つて居るから、何者であるか薩張り判らなかつたが。

「おいお留ツ……」と、今度は少し大きな聲を出した、此の男こそ別人ならずして今しも妖婦お良が三文の價値も無いやう罵倒して砂川欽哉である、彼れは格子

の棧せんの中から太い釘くわを打つて、時ならぬ白浪子の警戒けいけいをして居るのを知して外そとから聲こゑを掛けたのだ。

「はい……」

起つて玄關の上り端へ佇立たすんだお留は、夫れと知るやセメントで叩き上げてあ
る土間へ飛び降り。

「あら若様ッ」

彼れは格子戸を明けて欽哉を奥へ案内してから。

「お入來遊ばせ……」と、丁寧ていねいに挨拶をしたが、肝腎のお良は何處に風が吹くか
とばかりに空嘯そらうそぶいて少しも取り合はなかつた。

「お良ッ……」

お歌の負傷に次ぐ病氣以來、何から何まで承知のお留の前で、今までのやうな
奥齒に物を挟まつたやうな態度は改めてしまつて、成るべく世話に碎けるやうに

お良と呼んで居るけれどもお良は欽哉を見向きもしなかつた。

「……」

一言の答へもしないから、傍らに居るお留がハラ／＼して居ると。

「今日は馬鹿に御機嫌が悪いネ」

欽哉は一寸苦笑を洩してから。

「お歌は變りがないか子」

テレ隠しにお留の方へ言葉を掛けると。

「はい、どうも思ふ程妙々しくございませぬ」

「そりやア精神病と云ふものは、出る時には一時に出て、夫れで快癒期が遅いん
だ、どうだらう一層のこと何處か閑静な土地に轉地療養に遣つては、夫れども花
田が勧める通りにして、彼の男の病院へ預けやうかと思つて居るが子、なアお良
どうしたもんだらう」

斯う訊されると始めて砂川の方へ面を向けたお良は。

「どうもとも御勝手に遊ばせ、貴郎は百合子さんよりもお歌の方が大事で居らつしやるのだから」

「おい／＼何を云つて居るんだ、百合子は僕の子じやないか」

「其の子を奪られてから今日で幾日になります」

「ウム、待てもう少し、實は昨日漸つと見當が附いたんだが、取り返へすに少し骨が折れるんだ」

「何んと仰しやるんですか」

お良は唇を噛んで屹つとなつた。

「御自分の子供を取り返へすのに骨が折れると云ふお言葉は始めて承りますわ妾はもう今日限りお暇を頂きますから左様思召て下さい」

「まア左様怒るなよ」

些さか煙に捲かれた砂川は、猛り立つお良を仰へるやうにして。

「いろ／＼と計略が……？」

「意久地の無いお方、計略がどうなります、生命一つ投げ出す書生が貴郎お立關に居なくつて？」

隠くして居ることを萬々承知して居るお良は、赤裸々に手下ども乾分ども云はないが、砂川には却つて之れが強く應へる。

「好矣、長くは無いモウ二三日待つて呉れ、俺も男だ」

砂川の面上には何か決心の色が浮んだ。

三十

百合子を取り返へすのを、モウ二三日待つて呉れと云つた砂川の面上は忽ち怪しく輝き渡つた、其の言葉尻には熱もあつたし力も籠つて居た。

「判つたかお良……」

再び砂川から聲を掛けられると、お良は艶然微笑を洩し。

「夫れを伺つて胸が半分空きましたわ夫れでは改めてお歌ですが、モウ三四日経過を見て入院させて遣つて下さいまし」

流石の妖婦も一寸頭を下げた。

「實は今日明日の中に入院させやうと思つて居るんだ」

砂川は非常に熱心で説き出しつゝお良の同意を求めた。

「さうですわね、善は急げと云ひますから、一層今日連れて行きませうか」

「あゝ左様しやら、氣の毒だが電話で自動車を呼んで呉れ」

砂川の命に依つてお留が近所の料理屋へ電話を借りに行く。

「では妾、一寸仕度くをしますわ」

お良が化粧を始めた時、使から戻つて来たお留は、奥に寢て居るお歌の枕許へ

来て。

「歌ちゃん、若様かお前さんの身体を大層御心配なさつて今から花田病院へ入院させて下さるんだよ」

お歌は此の時精神が鎮まつて居たのが、お留の言葉を聴くと共に。

「勿体無いわね」

彼れは砂川の厚意を喜ぶのか、双眼には涙さへ浮べて居る。

「本當に若様の御芳情を仇や愚かに思つたら罰が當るよ」

「わゝ……」

お歌は重い頭を上げて。

「百合子様はあんなことに成つて居るし、私は若様に合はせる顔も無いんだがね」

「そんな時の廻り合せだから何んと思つて居らつしやらないよさア髪を梳いて上

げやう」と、お留がお歌の髪を梳いて居ると。

「どうもお待ち遠う様でした」

電話で命じた自働車は臭い煙りを後部から吐き出してお良の家の前に運轉を留めた。

「氣を付けて行きなよ、決して後との心配はしなくも可いから」と、優しい砂川の言葉、三人掛りで今はもう少しも騒がず、真度く氣抜けがして居るかのやうにポカリ／＼と眼を明けたり閉ぢたりする丈けのお歌を自働車に乗せて。

「では後とを頼むよ」

お留に留守居をさせて、砂川が戀の時を後にした自働車は清水谷を抜けて上野の廣小路を一直線に明神下の花田病院に着くと、既に砂川の手から通知がしてあつた爲め直ちに階上に在る一等病室へ通された。

「おう連れてお入來になりましたな」

顔はさして美しい男といふのでは無いが威嚴のある中に眼許にいつも滴れるやうな愛嬌を絶やさない院長の花田ドクトルが入つて來た、夫れと知つた砂川は一寸頭を下げ。

「お言葉に従つて連れて參りました、何分宜しくお願ひ申します」

畏まりました、出来るだけのことは必ず致します。

「夫れを承つて大に安心致します、時に甚だ何んですが、御存知の通り手の無い家内でございますから附き切つて居ることが出来ませんから看護婦一人お願ひ申し度いのですと」

砂川が院長に依頼して居る時。

「此の大泥棒ツ……と」

ムツクリ勿ね起きたるお歌は突然り砂川の胸倉を掴んだ。

三十一

今しも砂川欽哉が院長の花田ドクトルに對して、お歌の爲めに看護婦を依頼して居る時、今までスヤ／＼と眠つて居たお歌がスツクと起ち上つて。

「此の大泥棒めツ」と、絶叫して砂川の胸倉をムンズと掴かむと、本人の砂川よりも側に居たお良の方が驚いて。

「お歌ツ、お前何を云つて居るんだね」と、制止はしたが其の聲調は非常に亂れて居た。

「おい誰れか居ないか」

「職員を呼んだドクトルは。」

「どうやらまた發作したやうですが、鬱憂性精神病者に熟く斯うした突發的の症狀が在りますから決して御心配には及びません」

面色土の如くに變つて、口を利くことさへも出来無かつた砂川欽哉も、花田ドクトルから斯うした一言を聴くと漸つと安堵の胸を撫で。

「實はどうしたのかと思つて非常に心配を致しましたが、夫れを伺ひまして安心しました」

折り柄其室へ入つて來た一人の職員は院長の命するまゝに小さな洋盃で何か投薬をする時、忽ち精神が落付いたと見ぬ。

「どうも種々と御厄介を掛けまして恐れ入ります」
砂川がお良に向つて禮を云つて居るお歌は、唯つた今、自分の演じた行爲を知らないやうであつた。

「お歌や緊りして早く退院してお入來よ」と、お良が聲を掛けたが、お歌の耳には夫れが傳はらぬのか、吐く息さへも細き淡き眠りに落ちて居た、夫れをチラと眺めた砂川は。

「斯う云ふ病症では假令手が在りましても素人ではどうする事も出来ませんからどうぞ看護婦のところは？」

「御尤です、早速適當な看護婦を一人附けませう」

いつに變らぬ花田ドクトルの親切な言葉、砂川は再び頭を下げ。

「難有うございます、段々の御骨折に對しては眞度くお禮の言葉が無い位です。就きましては私も多忙の身体でございますから是れで失禮を致しまして後には良子を今暫く残して置きますから、今日中に看護婦を始め其他の事をお取り極め下さいますやうに」

「承知しました、看護婦を寄越させます、夫れに私も未だ外に患者を控へて居りますから、其の後とてまた悠り來ませう」と、花田ドクトルが此の病室を出て行くと、夫れを見送つた砂川は少しく聲を潜め。

「お良、夫れでは俺は百合子を取り返へしに行くから、お前は御苦勞でも後と始末をして來て呉れ」

「わゝ……」

ヂツと砂川を見上げたお良の眼許には云ひ知れぬ媚を含んで、男の鐵腸を溶かすやうな魔力があつた。

「では行つて來るぜ」

夫れと口へ出して打ち明けぬが、砂川は大なる決心と、大なる自信があるやうな表情をして戻つて行つた。

「私も看護婦さんが來ますと直ぐに戻りますから、成るべく早く様子を聽かせて下さいまし」

「よし承知した……」

表立關まで砂川を送り出した妖婦お良は、やがてお歌の部屋へ戻つて來ると、ベットの前に椅子へ腰を下ろし暫しは何か考へ込んで居たが。

「フ、ン」と、冷やかなる笑みを美しい面へ浮べた。

三十二

砂川の出で行く後しる姿を見送つた妖婦お良は、やがてお歌の部屋へ戻つて来て椅子へ腰を下ろすと。

「フ、ン」と、鼻先きへ冷笑を浮べてから。

「どうぐ決行らしいよ」

思はず口の端に出たのを、夫れと氣が附くと慌て、右の袂で唇を押へたさうして尙ほも注意深く、ドアを開けて外の氣配を窺つたが、誰れも聽て居た者が無かつたのを確めると、其の儘以前の處へ戻て來て。

「あの男が妾のやうな女の爲めに、本當に子爵の位も、財産も何もかも抛り出して仕事をするかしら」

うつとりとなつて、無心に寢入つて居るお歌の蒼白い額に腫を落して、ヂツと考へ込んで居ると何時とは無し眠む氣を催して來ると、室のドアを叩く者があるので夫れと氣の附いたお良は、我慢の出來ぬやうな眠むたさを堪へ。

「誰何です」

多分砂川が院長に頼んだ看護婦が來たのだらうと思つた。

「……………」

處が一旦ドアをノックして置きながら外からは何の應へも無い。

「妙だわね……………」

眠むたさを堪へた彼れは、出來ぬ我慢をして立ち上つた。

「誰何ですか」

些さか腹が立つので、自暴にドアを押し明けた、自分から叩いて置きながら自分の問ひに對して何んとも答へぬのが不快であつた、さうして頭を廊下へ出し

て見ると、其處には何人も居なかつた。

「あら誰れか来たのでは無かつたのかしら」

苦笑を洩した彼れはまたしても椅子の上に腰を下ろし。

「お歌は百合子の爲めに斯んな病氣に成つてしまつたが、思へば此の子も可哀想だわね」

鬼の心にも時には佛のやうな心が宿つて、お良は殊勝氣な雜念に耽り始めた、するとまたしても誘ひ來る睡魔はいくら堪へやうとしても堪へ切れなかつた、此の時何氣無く面を上げると、待たしても置た自働車の運轉手が無作法千萬にも靴穿の儘で此の病室へ入つて來た。

「お前さん何んの用で斯んなところへ入つて來たの」と、お良は咎めやうと思つたが、數日前から氣を使つて居る疲勞が出て居るのと、睡魔の力が強いので、心で幾々焦慮ても口を利くことが出來無い。

「お嬢様、イヤ奥様、餘り遅くなりますからどうぞ自働車へお乗り下さいまし」
と、告げた運轉手は、お良の身体を抱くやうにして階下へ降りた、さうして手早くお良を自働車へ乗せると。

「では出掛けます」

車上を振り返つて聲を掛けた、夫れを知つて居て遮らうとするお良は、どうしても聲を出す事が出來無い。

「まア……」

漸つと聲が出たと思ふと、其の自働車は音も立てずにスル／＼動き始めたのである、さうして此の運轉手は如何なる事を目論で居るのか、ハンドル握つた手を放しもやらずに、電車道であらうが、人道であらうか、乃至運轉規定外の細い小路であらうが、そんな事には少しの頓着もしないで宙を飛ぶやうに走つて行く。

三十三

お良を乗せた自動車は、此の世では見られぬ程の早さで走つて行く、最初は廣小路も判つた、根津も判つた、東京市でお良の知つて居る所は皆んな判つたがやがて見る中に廣い／＼街に出たが、まだ東京をよく歩いて見無いお良には、何處が何處だか薩張り見當が附かない。

門松を立つた大きな家が續いて、織るが如くに人が往き來するが、其人は唯れ有つて口を利く人も無く、眞度く何の音もしない町である、自動車も音を立てずに走つて行く。

と、思ふ中に此の運轉手は、氣でも狂つたのか、片ツ端から人に衝突したり轢き倒すこと數を知らない、然かも倒された者は音も立てずに、バツタリ／＼り車の下敷きになつて後に残るが其の怨めしさうな顔だけが、自動車に遅れずに隨て

來る、其の數一、二つ、三つ、四つ、十、二十一、百千……。

其の顔に取り巻かれたお良は、モウ何處も見えない、唯だ刻々に増して來る齒を喰ひしばつた口、血走つた眼なぞの印象の鮮かな顔を見廻して居る。

恐ろしくも無ければ、得意でも無い唯だ自動車の走るに任せて、増して行くことが判るだけだ。

と、又お良の眼の前に大きな首が、今度は血をタラ／＼と流して、ニューと一つ。

「砂川」、と、云はうと思つたが、小面倒なので唯だ微かに首を振ると、血を滴らしたまゝで、側へ寄つて多數の首と一所に蠢き乍ら隨いて來る。

と、又、汗びつしよりの爲吉の首が前から近寄つて來る、お良はピク／＼と手を動かして、膝から一寸も舉げたが、其の位の所で手を振ると、すうと右側の首の群れに雜交て行く、一寸見遣つて傍を向た隙に、ギリ／＼と音がするので真

向きになる、今度は両耳を剝がれた俊彦が、齒を噛みながら今にも飛び附きさうに迫つて来る、満身の力を籠めてハツと睨むと、今度もすうつと右へ避けて行く流石に疲れたお良は、腕から顔から傳はる汗が冷たい、ホツと一息吐かうとすると、往く手は一ぱいに大きな高田の首が現れた、お良はまたも手を舉げて除けやうとしたが、自動車走るのは差支がないが、いつかな高田の首は消えさうにも無い。

「爲吉さア」と、我にも無く叫ぶと、爲吉が赫つと見開いた両眼から母親お新の首——父親忠作の首——。

眼を据わて眺めると、両親の顔は一分四方位に、賽の目形に縦横に斬り刻まれた血の線が、赤黒なつて、血さへ泌み出て居る。

「誰か、誰がこんなに……エ……」

「親の創が眼に着いた」と、忠作老人はすうつと右へ避ける。

「他の者が何で御苦勞面しな、こんな細工をして呉れるかよ」と、母親のお新は左へ避ける。

「父あー……母あーッ」

待つて貰ひたさに立ち上らうとした時、爲吉がペロリと出した、眞紅の、長い廣い、舌の尖から丁度コロリと、轉がり落ちたやうに、バツと現はれた綾子の顔が、見る／＼中に手が生ねてそれがしたがしつかと眉を壓へ附けて一寸も動かない。

「何、何をするんです」

お良の聲は顫へた。

「ホ、ハ、騒がすにあれを御覽」

綾子が指さす方を眺めると、いつの間にか爲吉の舌の突に乗つた百合子が、ぐる／＼と舌に巻かれて、恐ろしい大きな鑿のやうな齒と齒の間に。

「お前の心一つで」

はつきりと云つた爲吉は、其心一つで、今にもざくりと、噛まれたらそれつ切り、腰を境に百合子の身体は二つになるであらう。

百合子は無心に笑つて居る！

「あれーッ」と、お良は必死の力を以つて立ち上らうとするが、綾子の力は妖婦の夫れに優つて居た。

「貴女どうなさいました？」

清々しい聲、それだけ馬鹿にされたやうに、ハツと夢から覺めたお良の眼の先きに。

雪よりも白い看護服を着た、正直銘紛ひ無しのお藤綾子が、片手に病床日誌を時つて、片手でお良の肩先さを押へて立つて居たのであつた！

三十四

恐ろしい夢から覺めて現實に返つた妖婦お良の前に、人もあらうに思ひかけ無い伊東綾子が、彼れの肩に手を置いたまゝ立つて居た、彼れお良の生れ故郷たる柳山一郷では其の苗字を云はうより單に旦那様と云ふ尊敬詞で通つて居る名望家の娘、しかも其の資産は五十萬を越ゆると謳はれて居る財産家の愛娘として、何等の束縛も、何等の不自由も無い筈の綾子が、斯う雪を欺くやうな看護服を着けて、此處に立つて居たのに氣が付たお良は、暫しは夢では無いかと思つた、夢ならば疾く覺めて現實に返へれど、口には出さぬが心の中では絶叫した、けれども事實は生ける証明者で、神の力を以つてしても有を無とする事は出来無い。

其の看護婦は矢張り、彼れが二度目の情夫伊東俊彦の愛妹綾子に違いが無い、我が戀慕つた高田爲吉が、村で兎角の評判があつたお良と駈落してと聞き、失戀

の結果か、悲嘆の極か、花に酒在る現し世の歡樂を捨て、死を以つて何事も忘るべく我が家の庭に年古りたる、然かも魔の住むやうな古井戸に身を投じて死を圖つたものゝ家に仕へた忠義者の抱車夫勝造の爲めに露の生命を助けられた綾子であつた。

「あら貴嬢はッ」

お良は夫れと知つて、再び夢路に入つたやうに、稍やしばらくは次の言葉が出なかつた。

「何んでございます」

看護婦の綾子は、お良から斯う云はれて始めて氣が付き、空の明くほどお良の顔を瞠目居たが。

「あらッ、お前……」と、一旦言葉を切つてから。

「忠作爺の家のお良じゃないかね、まア大變に變つてしまつたので、私、少しも

氣が着かなかつたわ」

綾子は言葉靜に斯うは云つたものゝ其の美しい眉の間には、隠すことの出来無い不快の色があり、と浮んで來た、さうして知らずぐの中うちに肩かたに置おいた手を離して一と足後とへ下つた。

お良も綾子の言葉を聴くと、ムラ／＼と顔色を變へて。

「他人を呼び捨てにするつて方が有りますか、昔は昔、今は今です、斯う申したらお驚きでせうが、猫の額のやうな趣後の柳山やなぎやまに生れた安井お良も、今では歴乎れきことした貴婦人ですよ」

終りの貴婦人と云ふ一語に力を入れると、ヂロリと綾子の面を眺めて肩を聳そやかして尙ほも言葉を重ね。

「何が何でも斯うやつて居れば、私は此の病院の客ですよ、さうして貴女は此の病院の奉公人ぢやありませんか、失禮千萬な一

夢に魔された汗を拭きながら、お良の言葉は鋭かつた、けれども綾子は夫れに驚かなかつた。

「お客様は假令乞食でも大切に取扱ひますわ、そんなことはお前から云はれなくとも、此の服の着る前に心得て居ますが、お客様と云ふのは、此の寢臺の上に居らつしやるお方ですわ」

綾子の言葉は、お良の熱し切つて居るとは正反對に、氷よりも冷かであつた。

「何んですつて？ダ……誰れが其のお金を出します」

「そんな事は私達には少しも關係が無いの、私達は患者さんさへ丁寧に取扱へばそれで宜いんですから」

口を利かせては、お良は到底綾子の敵では無い、けれどもお良は負けて引ツ込むやうな女では無い。

三十五

無智な、さうして教育と云ふものは薬にしたくても無い蛇のやうな女、唯だ金巻繪の重箱に馬糞を詰めたやうに、虚榮のみ憧憬して、腐敗し靡爛した醜骸一個を唯一の武器として、老い易き花の命と知らずに世の中を渡つて行かうとする妖婦、斯うして尊き天職に一身を捧げ、佛陀のやうな慈愛に富む心を以つて患者に接して居る伊東綾子、二人の相違は、其の人格、其の信念、其の精神の上に於ても雲泥の差が在る雪と墨のやうな懸隔が在る、珠玉と瓦礫のやうな相違が在る、従つて綾子の芳唇から洩れる言葉は、宛ら、金鈴を轉がすやうに滑かである、がお良は心のみいら立つて、唯だ綾子に負けまいとのみ焦慮るから、一語は一語を重ねる毎に聲のみ大きくなつて不知不識の裡に下賤の生れと云ふことを表白して來るのであつた。

お良はまたしても吃つとなつた、さうして綾子の面上をグツと覗むと、何時どは無しに椅子から離れて。

「何が何でも身分が違ひますよ、端したくない看護婦風情が、子爵夫人に向つて失禮の真似をすると承知しませんぞ、第一呼び棄てにすると云ふ法がありますかさア謝罪をなさい」

お良は斯う絶叫して綾子の前に寄り進んだ、すると子爵と云ふ一語に驚くかと思ひの外、綾子は依然として冷やかな態度を持続し。

「子爵夫人か、侯爵夫人か、私はそんなことは知らないけれど、我家の小作の娘で私の兄さんを欺して金を騙り、自分の両親に非業な死にやうをさせて私の一家を取り返へしの附かぬ不名譽のものにして仕舞て？」と、息を喘ませた綾子は。

「まだ有るわ、行くくは村の大立者に成らうと云ふ立派な青年を、此の世からなる魔道に落して、それで婦女の操なぞと云ふものは爪の垢程も持たない村の敵

を、私達の故郷では畜生と云ひますよ」

「ナ、何んです、畜生とは？」

憤怒の形相物凄いお良は、ブルブルと身を顫はせた。

「さう云ふ人間を私共の村で畜生と云ひます、私はお前が子爵夫人であらうが乃至公爵夫人であらうが、少しも偉いとは思はないのよ」

「モ……モウ一度云つて御覽、其の分では許さないから」

「云ふも口の汚れです、此の患者さんに怨みも仇も無いが、お前の知り合でお前と顔を合せるのは厭だから私は代りませう、お前の許さんと云ふのは、院長に何か讒訴でもして私を失敗らさうと思ふのだらうが、私の方からお先へ御免を蒙りませう」

流石のお良も、胸裡に一片の良心があるから、下げた頭を上げることが出来なかつた。

「餘計のお世話だが、並木の松の肥料に成るやうな、悲惨な末路を遂げないやうになさい、是れは伊東綾子から、郷里を同じにする魔のやうなお前に一言注意を
して上げるわ」

病床日誌を静に病人の枕許に置いた綾子は、呆氣に取られて居るお良を残して
病室を出て行つてしまつた。

「待ちなつせわ」

云ふだけの事を云はれて、自分の思ふことは云ひ返すことが出来なかつたお良
は、餘りの残念さに涙さへ流して居たが、やがて何か思ひ返へしたと見ぬ。

「今に吠わ面を搔かしてやるから覺わて居るが宜いッ」と、薄氣味悪くほゝ笑ん
だ處へ。

「看護婦に故障が有りました」と、云つて院長の入て來た姿を眺めると。

「院長さま……」

お良は双眼に無限の媚を湛わて、花田ドクトルを迎へ入れた。

三十六

妖婦のお良から、鐵腸男子も惱殺するやうな、無限の媚を堪へた眼で迎へ入れ
られた院長の花田ドクトルは、自分もお良と同じやうに其の優しい眼に笑みを見
せて。

「どうなさつたのです奥さん」

お良の脇に寄つて來た花田ドクトルは、白い手術衣に高い薫りのする香料を振
り掛けて居た。

「あのう……」

お良は態ざと羞耻の表情をして頭を下げた、後れ毛の二た筋三筋拂つて居る襟
脚が白い。

「どうなさつたのです」と、云つて來客用に装置して在る廻り椅子に腰を下ろしたドクトルは、お良の答が無い中にソツと起つて、其處にスヤ／＼と眠り入つて居るお歌の額へ手を當てゝ見た。

「別段熱も無いやうですな、自働車で走らして入らつしやつたから或は熱發をしやアせんかと懸念しましたが夫れが無いのは何よりです」と、云つて以前の椅子へ腰を下ろし。

「奥さん、失禮ですが、貴女様は餘程興奮して居らつしやるやうですが、どうかなさいましたか、醫者の處へ來て居らつしやつて御遠慮は御無用です」

藝妓が主なるお御意様で、其の他の藝人に續いては、公然其の病症を口外することの出來無い貴婦人などが、轉地療養と云ふ調法な名に隠れて、此の病院に姿を隠すと云ふ、婦人専門の流行醫師だけあつて、花田ドクトルには女を逸らさぬ愛嬌と手腕は、斯道に掛けての博士免狀位は持つて居やうと云ふ凄い男だて、全

快して何時でも退院して差支の無い貴婦人連で、一と月位は餘計に此の病院に在院して居る妙な現象も、考へて見れば伯爵家の姫君が自働車の運轉手と情死する現代では別段不思議でも、奇怪なる行爲で無いことに成つて來る。

「今、此の室へ來た看護婦さんは何んとか申しましたか」

漸く口を切つてお良は、斯う云つて花田ドクトルに訊した、すると花田ドクトルは軽く首肯して。

「別に……何んと云ふことも無いのですが、我儘なもんでして」

「先生、お隠し遊ばさないでも宜しうございませう」

お良は既に東京へ來てから、男に媚びる術を會得して居る、甘わるやうな、だれるやうな、然かも其の思はせ振りの眼と態度には、いかな石部金吉も兜を脱いで白旗を掲げやう。

「まア露骨に申せば、貴女に氣が置けて勤まらんと云ふのです」と、答へた花田

はニツコリと笑つて、お良の心の中を讀まうした。

「それだけですの先生」

お良の言葉は密よりも甘い、サツカリンより甘い。

「さうです」

「あら、どう云ふんでせう。

紅舌が縫れて、精神病者の枕許に、突如として艶かしい気分が流れた。

それは御婦人でなければ到底解釋をする事が出来ぬ氣の廻りですな、あの婦人も斯う申しては變ですが、十人並み以上の縹緞を持つて居ます、けれども貴女の

前へ出ると、緋牡丹の根に咲いた堇、然かも何等の趣きも無い白堇位の所でせう」

言葉巧みなお世辭を云ふ院長の眼には、何か深い意味が籠つて居た。

「御戲談ばかり……」

お良の眼にも、院長の夫れに答へるだけの閃きが宿つた。

三十七

敵の陣容鶴翼と見て取れば、直ちに魚鱗の備へを立てる突嗟の戦術、年こそ若い故郷を出で、山河幾百里、今は東の空で男を翻弄して居るお良、相手の態度に對して、觸れなば散らんの風情を示した、どうせ濡らせし袖なれば、對者の地位や名望次第で、雨に濡らすも雪に濡らすも同じことと思つて居る、従つてお良の嬌態は花田ドクトルをして思はず知らず其の目尻りを下げさせるのであつた。

「決して戲談ではありません、私は事實を赤裸々に告白して居るのです、然し貴女はあの看護婦を大層氣にされるやうですが、何か御無禮な行爲でも在つたのですか」

「いね」と、小さな聲で答へたお良は又しても資本の要らぬ秋波を花田ドクトル

の面へ送つて。

少々理由がございました、あの看護婦さんを存じて居るんですが、どうして唯今のやうな境遇になつたのか先生御存知はなかつて」

斯う訊されると、花田ドクトルは言下に。

「私の病院へ来てから間も無いので、委しいことは知りませんが、いづれ男に誘惑されて身のつまりが落ち込んだらしいので、つまらない看護婦會の手から來たんですがね、然しあの温和しい所を見ると不思議でならない所も有ります」

「左様ですか、どうでせう、あの看護婦さんを此の病室附きにして頂きますまいか」

「ナ……何と仰しやるんですか」

流石にお良に反問する花田の聲は大きかつた。

「オホ、、、先生あの看護婦さんが何んと云つても、私の部室に附いて居るや

うにして下されば宜いんですわ、そんなこと位は、先生なんでも無く出来るんでせう」

「それは今私が解雇すると云つたら東へも西へも向く事が出来ないのです、イヤ夫ればかりでは在りません、看護婦會の宿費と云ふのを十五圓ほど立替て有るんですから厭や應なしです」

「そりや幸ですわ、どうでせう私がお支拂ひ致しましては」

「イヤそれには及びません、決して今あの看護婦から、其の金を取らうとは思つて居ないのですから」

そりや無論さうでしやう、けれども先生、私に少しく考へが有るのですから、其の金はどうぞ私に拂はせて下さいまし」

花田ドクトルは、お良にどう云ふ魂膽が有るのか知らないが、餘ッぽど深い企みが有るらしい氣振りが見わるので、流石は自分が一度助けて、自分の病院に使

て居る綾子が、どうなることかと思ふと、一寸返辭に詰まるのであつた。

先生、何をそんなに考へて居らつしやるんですか、私の折り入つての願ひが

お厭やなんですか」

お良はヂツと花田ドクトルの顔を睨むやうに瞋めた。

「決して厭やと云ふ譯ぢや無いんですよ貴女……」

「そんなら私の願ふ通りにお極め下さいました」

お良は隙さず財布から五圓紙幣を三枚取り出して。

「それでは」と、渡すにかこつけて、無言の儘で緊つかと花田ドクトルの手を握

りしめた。

「……………」

宜うござんすね、あの看護婦を私に任せて下さい、厭やと云はせたり、逃がし

たりるゝ承知しませんわ」

お良は綾子をどうする心算りなのだらう。

三十八

偏頭痛、脊髄神経痛、安井良子、十八歳、と黒塗の札に白い字を、ベットの枕

許に、掲げ、お良は其の日から花田病院の患者となつた。

附添の看護婦、夫れは此の患者の熱心なる希望を、院長の花田ドクトルが容れ

た、姓は伊東、名は綾子。

「チヨイと……」

態ざと解いた漆黒の髪を、何んの惜し氣も無く、ダラリと、雪かど紛ふ白い枕

覆に亂した、餘つた末は寢臺の前へ、如何なる國の女王の御座を裝飾する、玉に

黒玉を編んで簾したるかど許り、限り無く怪美人お良の寝姿は妖艶であつた。

「チヨイと看護婦さん」

半眼に見開いた眼は、毒々しい舌よりも勝つて綾子に見わた。

「……………」

俎上の鯉、なら未だしも、生き乍ら沸り立つ油の鍋に投げ込まれた、鱈か鮒か
勿ねたどて、藻掻いたどて、所詮逃れ出づ可き運命でも無い。

「居睡りをして居るのかい」と、ヂロリ綾子の面を眺めたお良は、身体をくの字
なりに起こすと、右の脇を枕の上へ突て。

「患者が大事で、乞食でも働はるとか云ふ看護婦さんが、居睡りをするなんて餘
りだわネ」

「はい……………」

時からの一ど時雨、夫れは綾子の双眼から、膝の上へ溶ち散つた、露の玉であ
つた。

「ねわ看護婦さん、そんな不親切では患者が息を引取る時も、色男と乳くり合て

居る夢でも見て居るのだらう」

「……………」

悪罵と冷嘲、綾子は身を悶わてス、リ泣いた。

「あらお前さん、下手な宿場女郎のやうに泣き落しと云ふ奥の手を知つて居るの
ネ 暇の時に私にも傳授をして下さいな」

聴くに堪へぬ悪口雑言に、流石の綾子もキツと面を上げ。

「もし……………」

後どを語らうとする綾子の言葉尻りを慌て、遮るやうに。

「何んだねわ其の顔は、宛で閻魔様が鹽辛らを嘗めて居るやうな御面相じやない
か」

再び斯う口汚く罵つたが、尙ほも言葉を續けたお良は。

「本當に高いお金を出して雇つたんですから、少しは夫れを察して働いて貰はな

いと困るわ」

「ツイ迂つかりして居りました」

口惜しいけれども今の境遇の綾子は萬斛の熱涙を呑んで素直に答へた、するとフ、ンと鼻先きで冷笑して。

「どうも頭痛がして困るから一寸揉んで頂戴……」

「は、はい……」

人の地位は變れば變る、現在我家の小作の娘、現在の我家に世間に顔出しの出來無い騒動を起させた仇敵其の仇敵の枕頭に、其の蛇のやうな女に毒吐かれて、一言半句の口答へも出來無ければかりか、揉み始めた白魚のやうな指頭が震へるのも無理が無い。

「あら汚いわ、鼻水などを人の顔に滴らしてさ」

綾子は慌てゝ。

「御免下さいまし、遂ひ」

これは鼻水か、我れにもなく嘔り上げて、物の移り色に染まぬ白半巾で、拭ふた血の涙の色を見よ。

三十九

綾子は泣いた、綾子は泣いた。

人も在らうに我が家の小作人たる忠作爺さんの娘、然かも村では辻の郵便函と云ふ綽名で通つた尻軽娘、其のお良から辱しめられるに事を飲いて、寝そべつた儘頭を揉まされる今の境遇、往事を追想した綾子が、三寸の胸底に萬感が往來して、思はず知らず血の涙を落すと。

「あら鼻水じやないの……」

知つて居ながらの無理難題、綾子は再び嘔り泣いた。

「おや泣いて居るんだね、口惜しいかい、お前さんは成る程大家のお嬢様で、私は水呑み百姓の娘だ位は、先刻お前から改めて云はれなくも心得て居るわよ、だげだね、綾……看護婦さん、夫れは越後に居た時の話をだよ、裸体になつてそれで較べた腕の、甲斐性の有る無しが本當の人間の價値だアネ、苦勞して成つた看護婦は」と、冷やかにほゝ笑んでから。

「矢ッ張り樂をして成つた子爵夫人に使はれるんだよ」
勝ち誇つたお良の氣焰は、化して萬丈の電虹を吐く。

「……………」

涙はモウ出ない！言葉も無い。

「おや、馬鹿に黙つて仕舞つたね、看護婦さん、少し文句を並べて見ないかネ」
毒蛇の紅舌は、ペロリくと、牙を隠して恐ろしく人を刺す。

「何んですつて」

「何んでも無いわ、少し文句を並べたらどうだと云ふのさ、お前さんは驕なのか
い」

ブルブルと身を顫はせた綾子は。

「文句を並べるだけ汚ららしい、お前は患者、私は看護婦それだけ、盡すだけは盡して上げやう、汽車に乗る客と有れば、自分の車夫でも驛長は大事に取り扱ふのが人間の道なもの、だかお良、お前はそれで一生無事に過ぎられたら過さして御覽、悪いことをして無事に榮へることの出来る世の中なら、悪人許りの世の中になつて仕舞ふわ」

綾子の聲は熱して來た。舌もこわばるほどに熱して來た。

お良の眉もピリりと上つた。

「ホ、、、」と、指のダイヤが光る掌を返へして口のあたりを蔽い。

「學問とか云ふ小六ヶ敷いものゝ有る人は違ふはね、今の世の中に善人で一生呑

氣に好い身が過ごされたら、過ごして御覽遊ばせだ、私は未だ自分で手を下して悪いことをしないでだけに善い果報の廻つて来やうが遅いのですよ考へて御覽な、生きた証據は現に私の両親で判つて居るわ、私の両親は正直正道で柳山一郷では誰れ知らぬ者も無い人だつたの、夫れだのにあの死に様はどうかね」

お良の聲は一語々々と激して来る。

「お前の仕打ちが悪いんぢやないの」

綾子の聲も非常に震へを帯て来た、するとお良は、白い齒を噛みしめながら、ベットの土へ身を起し。

「私の仕打ちに何處が悪い處があつたの、憚りながら村の物一つ盗つたではなし自分立身出世をしやうと思つて村から脱け出したのが、そんなに大罪なんかね、學者のお前さんに其の理由を承りましやうかね」

「……………」

「夫れ御覽な、返辭の文句に詰るぢやないか、それはさうと、チヨイと私便所へ行くのが大儀なんだが、此のまゝでお小用の始末をして頂戴な」

四十

根津のお良が住居の淋しい正月に引き變へて、神田榮町の塚本の家では賑やかな正月を迎へた。

それは女房お藤が中心になつて居る此の一家に、お藤が熱望して居た百合子が境のお美代婆の處から迎へられたからである、従つて思慮深い爲吉、飯島が萬一の場合を心配して立派にお美代の孫と云ふ籍まで作り、名も時子と變へて今は塚本一家を照らす光明になつて居るのだ。

「お母アちやん」

今まだ相手が無き爲め、山のやうに買つて貰つた玩具を弄つて遊んで居た時子は

此處へ入つて来たお藤の姿を見ると、さも懐かしさうに走り寄つて来た。

「お、時ちゃん、温和しいのネ、何を御褒美に上げませう」

お藤はモウしつかと抱き寄せて、溶けて流れるやうな慈悲深い眼で百合子の横顔を覗く。

「あたちネー、あたち子、上野のお山へ行つて見たいの……」

鶯もまだ片語や浅き春 廻らぬ舌の百合子は、反つてお藤に愛情を増させるのである。

「あ、そ、う、上野のお山で何を見て来るの、動物園の虎、お猿さん」

「い、い、わ」

「西郷さんの銅像……」

「い、い、わ」

「それぢやなアに……」

「上野のお山にネ、ホラ真ッ暗で、お墓が澤山有るんでせう」

「あ、谷中の子、恐い所ですわね」

「い、い、わ、あしこに子、歌やが待つて居るわ」

「歌やつてたアレ」

お藤には何が何んだか薩張り様子が判らない。

「ほら、子お母アちゃん、歌やが子、ひどい目に逢つて、血い血ごつさり出してお嬢ちやーんで、あたちを呼んで居たでせう」

お藤は此の話の意気が全然解らう筈が無いから。

「いつ……」と、訊して見た。

「もう先よ……」

「いくつ寝ねして」

「子、十と十と、まだく澤山十と十寝たの……」

劇しい境遇の變化は、百合子に日數の概略の見當もつけさせない。

「それぢやア、本當にモ一先子」

「さうだワ、だげど歌やは待つて居るのよ」

「さう……お……」

宜い加減にあしらうもの、お藤は何が何やら判らんが、然しお美代婆アの手
に渡るまでに、横濱で死んだと云ふ母親に別れてから、何か大きな苦勞が有つた
のを、子供心にも覺て居るので有らうと思ふと、一層百合子が可憐しくなるの
だ。

「歌やはモウ居ないわ、歌やの代りにお母ちやんが可愛がつて上げるわ」

「あたちお母ちやんが一番好きよ」

「さう、明日淺草へ玉乗りを見に行かうね、」

「お母アちねんも行くの」

「まア、時ちやんを一人で誰が」

お藤は重ねて接吻をして、折角氣が紛れて來た百合子を對手に、時の移るのも
知らずに居ると。

「お免なさい」

表の入口に聞き馴れない男の聲がした、しかも其聲は近所合壁へも聽わるやう
に大きい。

四十一

百合子のお時が、廻らぬ舌で、誘拐された當時の事を思ひ出しつゝ、自分と共に
根岸の家を出て來た女中のお歌を慕つた言葉、夫れが何んで事情を知らぬお藤
に判るべき筈が無い、連れ添ふてから幾年かの歲月を送り、百年の苦樂を共にす
べき良人の素性さへも知らぬお藤が、何んで頑是無き百合子の云ふ事が判らう筈

があるものか。

本當に斯んな小さな時分から苦勞をして居るんだね、知らぬことゝは云ひながら、餘程心に思つて居ればこそ、是れほどまでだ慕ふのだらう」

夫れから夫れへと想像を走せたお藤は、やがて百合子を巧みに綾やなして結局淺草公園へ遊びに行かうと云ふことになる、百合子は夫れで氣が紛れてお歌の事などは口になくなつてしまつた、さうして可愛さの餘り、意地らしさの餘り百合子を犇々と抱きしめて其の額に熱い接吻を與へて居る時、表に立つた一人の男が近所合壁にも聴こゆるやうな聲で案内を乞ふと、夫れに氣が附いたお藤は。

「はい……」と、答へて女中部屋で自分の縫物をしてお市に向ひ。

「お市やお客様のやうだよ」

聲を掛けたが女中の返辭は無い。

「御免下せね」

またしても案内を乞ふ男の聲。

「はい唯今……」

斯う答へたお藤は。

「お市は居なのかい」

今度は前よりも大きな聲を出した。

「は……はい……」

白河を夜船で下る高野、お市は今しも白晝の疲れで居眠りをして居たが、主婦の聲に驚いて慌て、眼を覺し。

「お内儀さん、何か御用でございますか……」

彼れは眼の縁を擦りながら、座敷の闕際に手を突いた。

「何を寢ぼけて居るんだねわ」と、吹き出し度うなるのを耐へたお藤は。

「玄關にお客が在るやうだから早く取次に出たら宜いだらう」

「あら左様でございますか、どうも相済みません」

慌て、玄關へ出て行つたお市が。

「入らつしやいまし」

式臺の處へ手を突いて來訪客の面を仰ぐと、客と云ふのは年の頃五十前後の、然かも身装りの卑しい薄氣味悪い男であつた。

「旦那に一寸お目に掛り度くて参りましたからさう仰しやつて下さい」

折り柄塚本が不在であるから。

「旦那はお留守でございます」

「夫れではお内儀さんに逢はせて下せね、名前は改めて名乗らないでもお目に掛れば判るんだから」

「へね……」と、答へて奥へ入つて來た女中のお市は。

「お内儀さん、お客と云ふのはみすばらしい姿をした男ですが、旦那様にお目にかゝり度いと云ひますから、お留守だと申しましたら、そんならお内儀さんに逢い度い、名前は云はなくても逢へば判ると云つて居りますがどうしたら宜いでせう」

お藤は一寸眉を顰めたが。

「どこかの工事の者だらう、見世の者に捌かせりや宜いのに子、然し今更らそんな事を云つて居たつて仕様が無いから真ぐに此處へお通しな」

どうやらお藤は不機嫌であつた。

「はい……」

手持ち不沙汰の態で玄關の方へ出て行つたお市は、やがて一人の男を連れて入つて來た、が此の男こそ、趣後の柳山では、伊東家の番頭と云ふ名で通つて居る一之木戸の高利貸越名權太郎であつた。

四十二

女中のお市に案内され、塚本次郎の留守中に妻女に逢ふべく奥へ入つて来た越名権太郎の姿は、成程お市の云ふが如く憐れなほご見すばらしいものであつた。

「御免下さいまし」

自分の身装りを耻じて居るのか、夫れとも他に卑下することがあるのか、怯ぶくしながら腰を屈めて座敷の中へ入つて来た。

「御免下さいまし」

お藤が目顔で命じて、お市に敷かした座蒲團を押し退けると、権太郎はペコリと頭を下げ。

「これはお内儀さんでございませうか、始めましてお目に掛ります、私は新潟縣の越名権太郎と申す者でございませうぞ此の後共宜しく願ひます」

顔や身装りに似合はぬ丁寧な挨拶をされるとお藤も軽く會釋をして。

「おや左様でございませうか、始めてお目に掛ります、仰せの通り私は塚本の家内でございますが、お入來になりました御用向きは何んなことでございませうか、生憎良人が留守を致して居りますので何も判りませんが、矢ッ張り工事のことでお尋ね下さいましたのでせうか」

斯う云はれると、権太郎は片頬に微笑を浮べ。

「へエまあそんなもんですか」と、答へてから。

「誠に失禮ですが一服ございませう」

権太郎はお藤の膝の脇に在つた煙草を取り寄せると、如何にもかつて居たやうに、さも旨さうに二三服續け様に吹かしてから。

實はお宅の旦那様にお伺ひしたいと思つて来たんですが、お留守なれば據處ありませんから、今日は何も申さんで歸りませう、然し御覽通り不如意な有様で

すからどうぞ一片の御同情をお寄せ下さいまして何とか一つ」

権太郎は亦もや頭を下げると、伏し目勝な面を上げてお藤の顔色を伺つた、夫れを黙て聴て居たお藤は、見れば働き盛りの男が氣の毒な身装りであるから、尠らず同情を寄せ。

「私達は見世の方のことは少しも知りませんが、折角お入來になつて其のやうに仰しやるのを拳固でお歸へし申すことも出来ませんから、私だけの志を致しませう」

流石は酸いも甘いも噛み分けて居るお藤、然かも土木請負師を良人として多くの若い者を使つて居る身分では、相手に顔を赤くさせるやうな思ひはさせ無いのであつた。

「難有うございます」

「権太郎はまたも頭を下げて。

「矢ッ張り音に響いた塚本次郎親分の御内儀さんだけあつてお判りが早いのは御感心致しやす」

彼れの言葉は俄に野卑に流れた。

「厭だね此の人は、馬鹿にお世辭を並べてさ」

軽く笑つて起ち上つたお藤は、箆笥の抽斗から出した何程かを懐ろ紙に包んで別に良人が持ち古した、とは云ふものゝ本鱈の袋にながどのさしの附いた、緒も瑪瑙の五分玉、其の貰入れに銀煙管を附けて、中に家で喫んで居るほかさないのをキチンと詰て。

「もし越名さん、良人が居たらそんなことをするか知りませんが」と、云つて権太郎の前に座ると、其の手許をヂット噴めて居た権太郎の面には冷やなる笑みが浮んだ。

四十三

権太郎は先刻からお内儀のすることを眺めながら満面に冷やかなる笑みを浮べて居た、が、そんな事に氣の付かぬお藤は。

「もし権太郎さんとやら、是れは私のホンの志だけですから、後とで良人が歸つて来て少ないと小言を云はれるかも知れないけれど、女は自分の好きにお金の出し入れが出来ないんですから、悪く思はずに下さいよ、それから是品は腰の物をお持で無いやうですから、良人の使ひ古るしで、却つて失禮かも知れないが、是品を……」

斯う云つて紙幣の包みと、貰入を権太郎の前へ差し出すと。

「へッへッ、、、、どうも何から何まで御心配下さいまして何共相済みません、どうせ頂いたもんですから甚だ失禮ですが一寸中味を拜見します」

無作法千萬にも、彼れはお藤の厚意で出して紙包みを解いて見た、さうして一寸眉を顰めると。

「お内儀さん是れは拾圓ですね」

何故か権太郎は妙な顔をして其金とお藤の顔を見較べて居る。

「わゝ、本當に少くしてお氣の毒ですが今も云ふ通り、良人が留守ですから今日は夫れで我慢をして下さいまし」

何氣無く軽く答えて居るが、お藤も相手の態度に對して胸中尠からず不愉快を感じた、すると藤太郎は些さか前へ膝を進め。

「お内儀さん、お前さんは氣の毒と云ふ字はどう書くか知つて居るのかネ、土臺問題になりやしねえ」と、権太郎は其の紙幣と貰入を前に置いて開き直り。

「僕はネ、斯んな目腐れ金が貰ひたさに態ざく越後くんたりから東京へ出て来たんじやアねえせ」

お藤は普通ならば二三圓も包んで追ッ拂ふのが當然であるが、見れば相手は相當の人品も有る男であるから、殊更に十圓と云ふ金を包んだのである、處が意外千萬にも相手の態度が俄に變つて、さも不足らしい云ひ草であるから、流石のお藤も顔を變へて。

「左様云ふお前さんは、良人に貸した金でもお有りなさるのかい」

お藤が胸中の不快は其の寸言に裡に現はれた。

「貸しが在るから斯うやつて來たんですよ、お内儀さん、お前さんも餘り目先さが見へませんね、イヤサ塚本の親分のお内儀として思つたよりも大益暗だね」

權太郎の聲は鋭いほど角が在つた、さうして其處に小さくなつて居る百合子をヂロ／＼眺めては何か思案に暮れて居た。

「おや妙な音羽屋を極めるね、夫れでは良人に何を貸したの？」

「貸したものかね、實はお前さんの可愛い亭主には、無くなつたら向ふ先きの見

ね無ね首が一つ貸してあるんだ」

「わッ」

「さア、俺れが塚本を名指しで尋ねて來たことから考へても大概の見當は付くだらう、お前さんは何にも知らぬらしいから、特別に黙つて歸るのも慈悲の一つとは思つては居るんだが、此の大の男に對してタツタ十圓紙幣一枚とは餘り馬鹿にするない」

此の一言を聽くと、薄氣味惡へなつて來たお藤は。

「何んだか知らないが、左様云ふことだつたら、良人が宅に居る時に尋ねて來て下さい、私は我家の商買には少しも關係が無いのだから……」

へん關係が在るとは眞逆か云はれめへよ」

權太郎の聲が段々大きく成つた時、突然此の部屋へ飛び込んで、物をも云はず襟首を掴んだ男がある。

四十四

猿猴健次が塚本次郎と名乗つて其の筋の眼を晦しつゝ、表面のみは堅氣の請負業者のやうな牙城に乗り込んで来た一之木戸の越名権太郎は、素より帯をした金を強請りに来たのだが、幸か不幸か肝腎の健次が留守であつて金を出して呉れたのが其の女房であると知ると、彼れは忽ち相手を見縊つて、聴ねよがしの凄文句を並べ始めた。

「ナ……何んですつて」

聴き捨てならぬ一言に、流石のお藤も顔色を變へた時、突然り此の部屋へ飛込んで其の襟髪を掴んだ男。

それは健次の爲めには今は二無き乾兒と信賴されて居る爲吉であつた、此の家は勿論、健次まで 飯島と偽名をして居る高田爲吉であつた。

「やい一之木戸の越名ツ、手前はまた俺れを忘れめいな」

相手の權幕に氣を吞まれた越名は、不圖爲吉の面を仰ぎ。

「やツ……君はツ……」

意外千萬の男に逢つた爲め、越名の顔色もサツと變つた、夢にも思はなかつた爲吉と、場所も在らうに斯んな處で逢つた越名が顔の色を變へたのは無理も無い「君はも糞も有るかい、サア此方へ出る太わ野郎だ、國で散々ばら悪事を働きやがつた揚句我家のお内儀さんまで強請つてごうするか見ろツ」

するくつと引き摺り出して行く背後から、お藤は例の佛性の。

「一寸飯島さん、あんまり手荒いことをしては不可ないよ」

ニツコリ笑つた飯島の爲吉は。

「大丈夫ですからお内儀さんは心配をしないで下さい、やい越名、丁度僕が歸つて来たから宜いやうなものゝ、歸りが遅かつたら、手前のやうな畜生は何をしや

がつたか判つたもんじやアねね、本當に圖々しい野郎だ」と、罵りながら引き立て、來たのは、事務室の二階に在る自分の部屋と極つた八疊であつた。

お藤が心づくしである、緋縮緬の大座蒲團がまづバツと人の目を射て、此の部屋を明るくして居る、床の間の掛け軸も、違ひ棚の置き物も何から何まで一流の贅を盡した品ばかりだ、さうして此處まで連れて來ると。

「さア越名君、其處へ座り給へ」

權太郎を放した爲吉は、其の緋縮緬の大座蒲團の上へドツカと胡座を掻いた、權太郎は急に打つて變つた爲吉の態度に呆れてモジ／＼して居ると。

「君も悪黨に似合はない煮ね切らん男ぢやないか、斯んなことなら僕等より君の方が餘つほど先輩ぢやないか、夫れだのに鳩が豆鐵砲を喰つたやうに何をそんなにキヨロ／＼して居るんだ、一之木戸の越名權太郎はモウ少し膽ツ玉の太い男と思つて居たが、東京へ連れて來ては三文の價値も無いね」

斯う冷評された權太郎は一寸頭を掻いてから。

「何んだか薩張り理由が判らなく成つて來た」と、獨語した權太郎は四邊りを見廻してから。

「高田君、第一君が斯んな處に居やうとは思はなかつたよ」
懐ろ手の儘フ、んと笑つた爲吉は。

「僕も思はなかつたんだから君の驚くのも無理は無いよ」
「一体どうして斯んな處へ來たんだね高田君」

「これにはいろ／＼と仔細が在るが、夫れより先きに僕は君に聞き度いことがあるんだ」と、小聲で語つた爲吉は膝を進めた、火鉢の上には南部龍雲堂の鐵瓶が松風の聲……。

越名は夢に夢見る心地で爲吉の前に座つて居た、すると片頬に冷笑を浮べながら其の様子を眺めて居た爲吉は、何か思惑在り氣に越名に聞き度いことが在ると云つた。

「僕に聞き度いことが在ると云ふのかね君ッ」

「さうだ……」と、云つて起ち上つた爲吉は、室外に於ける立ち聞き者の有無を調べて以前の場所へ戻つて來ど。

「何よりも先きに聞き度いのは伊東家の支配人たる君が、斯んな見すばらしい姿になつた行きさつを聴かうじやないか、話に依つては又何んとか相談のしやうも有るからさ」

斯う打ち解けて出られると、越名は軽く首肯て。

「高田君、君は故郷を出てからのことは何も知らないと思はれるね、大に變つたことがあつたのを少しも御存知無しなんだね」

「故郷の者には誰れにも逢つたことが無いから、そんな出来ごとが在つたか少しも知らないのさ」

「左様なのか、夫れなら大に物語ることにしやう」

爲吉が世話に碎け然かも非常に打ち解けて居るので、夫れに誘はれた越名權太郎は、伊東家を中心として起つた出来ごとをば、細大洩れなく物語つてから。

「で、左様云ふ始末で僕はまア危い生命を助つたとは云ふものゝ、危くつて故郷に居る譯にも行かんだらう、俠客の演ることも、是れはと云ふ時には随分思ひ切つた真似をするが、あつした村の百姓達はそれよりも飛び放れた無茶苦茶のことを平氣の平左でするから迂つかりしては居られないやね」

活動寫眞のフィルムか何かのやうに變轉して故郷の事を聴くと、流石の爲吉も暫くは往時を追想して居た、さうして自分の前に在つた溢茶をグツと呑み干してから。

「そりやさうども、先祖代々から庄屋小作で傳はつて来たのだから、時と場合に依つては村の人達は領主よりも庄屋の命令が利いた習慣が在つたのだから其の位の事はしたらうね」

「さう云つた次第で危くつて仕方が無いから、僅かな家財道具を賣り飛ばして夜逃げ同様に姿を隠したものの、思へば残念でく堪らないから、或る晩ソツと伊東家へ忍び込んで、何んでも宜いから行き掛けの駄賃を盗らうとした時、生憎迷ひ込んだのが綾子さんの部屋さ」

「フーン……」

爲吉は思はず前へ乗り出した。

「所が綾子さんは病氣中だったので眼を醒して居たから堪らね、アレーと聲を立てさうに見るから、聲を立てられては此方の破滅と思つて早速猿轡を噛ましたがネ、賭て考へて見ると何處に金が有るのか薩張り見當が附かないのだ」

「君がか……」

「イヤ其の以前なら彼の家の手を知つて居る者は僕が一番だつたがね、例のお菊が入つて来てからあの阿魔が一切を切り廻して居たんでね」

「成る程……」

「そこで此奴ア一番、此の生き金を引ツ攫つて行けど、思ひ直して實は濟まねが私は爲吉から頼まれましたお嬢さんをお迎へに参つたのですと斯う云つたのさ」

「何んだつて、僕に頼まれたツ」

爲吉は屹つと眼を睜つた。

四十六

爲吉は越名から、少しも飾りの無い赤裸々の告白を聞き一として、驚かぬ事はたかつた、さうして一番の最後に越名が綾子を誘拐する爲めに自分の名を詐つた

と聴くと。

「何んだって病氣中の綾子さんに僕から頼まれたと云つたつて？」

吃つとなつて問ひ詰めた爲吉は、双の拳を握りしめて五体をブルブルと顫はせ

た。「君に對しては何共濟まないが、綾子さんを伊東家から盗み出すにはそれが一番の手なんだ、君だって木や石では無いから、綾子さんの素振りが判らなかつた事は無からう」

「……………」

黙つて答へぬ爲吉は、ホツと長い嘆聲を洩した。

花につけ雪につけ、幼けなくして孤兒となつた爲吉が、一人でぼんやりと伊東家の屋敷中へさまよい込み、空行く雲に、飛ぶ鳥に、見つめては悄然と物思ひに耽つて居ると、いつも奥から走つて出て来て。

爲吉「ア……」と、母親をせがんで貰つた菓子分けて呉れて、終日心置き無く遊んで呉れたのは、緋鹿の子の振り袖に稚子鬘の美しい綾子であつたことは、今になつても爲吉が夢にも忘れる事の出来無い追憶の一つであるのだ。

物心が附てからも、二人の往來は絶えなかつたが、どうやら人目を愧ぢるやうになつた頃、爲吉は、自分の境遇を自覺して、及びも無い高嶺の花だと我れど我が心を叱咤して、鋤鋤に親しくなり、綾子とフツ、リ遊ばないやうになれば綾子も其の内に新潟の女學校へと、忽ち隔れた十里の空に、忘れたでは無いが、爲吉は青春の慾望と熱情をお良に注いだのであつた。

「お良は俺が戀の相手じや無い」
爲吉は今でも、自分の美しい初恋と云ふものは、伊東家の令嬢綾子を相手に生れたものであると信じて居る、がさう深くならなかつた間に別れた爲めか煩悶する丈の痛手こそ負はなかつたものゝ、優しい、柔かい想出の胸の宮居に、秘め

齋く御龜の中に、綾子は験かに生きて居る。

其の験かに生きて居る綾子に、種々の思ひ出に、眠られぬ夜に逢ふと、爲吉はお良に對する意地立てから、魔道に落ちた事を悔ゆることもある。

無難……。

「八幡照覽あれ、唯の一時、惡魔のお良が心からの笑みを買はずに死ぬ男では無い」と、猛然として何事も忘れてしまつて、唯だ一日だけで宜い、百萬圓の長者となつて、夫れで満足して死なうと覺悟して居る。

喰ふに不自由の無い、居るに不安の無い、無垢の青年が、斯うした悲惨なる徑路を辿つて行くとは、思へばお良も一世の魔王ではある。

今爲吉は、此の忘れ難い綾子が、爲吉の名の爲めに易々と動くを聞いた時、はッとはかり、何者とも知れない大きな力で打たれたやうに俄に胸の鼓動が劇しくなつて来る。

「なア越名君、どうした理由で僕をダシに使つたのか、夫れから先きに委しく話して呉れ、外のこのなら兎に角夫れは餘んまりの遣り方だ」
斯う云つて越名の答辯を促して居る爲吉は、強て落ち付きを見せては居るが、咽喉が干上つて、空唾を呑むことが徒らに多い。

四十七

先刻から爲吉の様子をヂツと眺めて居た越名權太郎は前後を委しく語れと促される、忽ち片頬に薄氣味悪い笑みを浮べて。

「そりやね君ッ」

越名は一旦言葉を切つてから。

君が、あのお良の阿魔と駈落ちをしたと云ふ評判が村中に傳はると、綾子さんは自分の部屋へ閉ぢ籠つて一二日は泣き通して居たんだ」

「さうして」

爲吉は思はず息を喘ませた。

「するとね君、三日目の晩に自分の部屋を抜け出して、あのそら庭の隅に在る古井戸へ身を投げた位じやないか、所謂意中の人であつた君にはお良と云ふ餘所に増す花があつたので失戀の入水と云ふ奴だ、その位だもの君の名を詐つて連れ出すのは何んの造作も無いことだらう、其處を僕が覗つたのさ」

「エーッ……綾子さんが入水」

聞く度び毎に熱血兒高田爲吉は意外の感に打たれるのであつた。

「本當かい夫れは」

「本當だともさ、夫れから幸ひにも死んだ勝造爺さんが其の水音を聞き付けて助け上げたが、夫れが爲めに大熱か出て、君の名前を囁語に云ひ通して寢て居たんだよ」

「そんな病氣で居る綾子さんを、君はよく引つ張り出す氣になつたもんだなア」

爲吉は呆れて越名の面をヂツと瞠めた。

「イヤ僕が連れ出した時分には殆んど病氣も全快して居たんだ、さうして僕の言葉も聴くと眞ッ度く君の處へ行けると思つたと思つたを見て喜んで僕に隨いて來たのさ」

「フーム、さうしさを何處まで連れ出したのだね」

爲吉の胸中には刻一刻と不安の念が起つて來た、何んだか聴き度くないやうな忌はしい事實に逢着じやアないかと胸は早鐘を撞くやうであつて。

「お定りの東京さ」

「東京、東京の何處へ連れて來たんだね越名君」

「懐ろには多少の金を持つて居るだらうと思つたから、上野停車場前の群玉舎と云ふ旅館へ落ちて着いたのさ、さうして其の晩一杯機嫌で口説いたと思ひ給へ」

爲吉はサツと顔色を變へて。